【論文】

# 黒人奴隷のファミリー・ヒストリーを紡ぐ
## ――18世紀北米社会を中心として――

三　瓶　弘　喜

# Weaving Family History of Slaves in 18th-Century America

**Hiroki Sampei**

要旨（Abstract）

In the 18th and early 19th centuries, some paintings of the American market depicted African-American women peddling on the streets. This study attempts to weave the independent lives of black slaves by considering the economic activities of these “black slave women in the market” as an important component of the “slave’s economy” and relating them to the problem of slave family formation.

In the 18th century, black slaves actively sought partners through illegal visits outside plantations and formed families by mutual consent. However, the families of slaves were always worried about being separated, and one of the means of countering this was the “purchase of free status.” The black women in the market depicted in the paintings were women peddling to buy freedom for themselves, their husbands, and their children.

キーワード（Keywords）：奴隷の主体的経済 slaves’ economy、通い婚 cross-plantation marriage、
逃亡奴隷広告 advertisements for runaway slaves、自由身分の買い取り purchase of free status、
菜園と市場販売との結合 garden-marketing complex、“wage”（「納入金」）

## はじめに

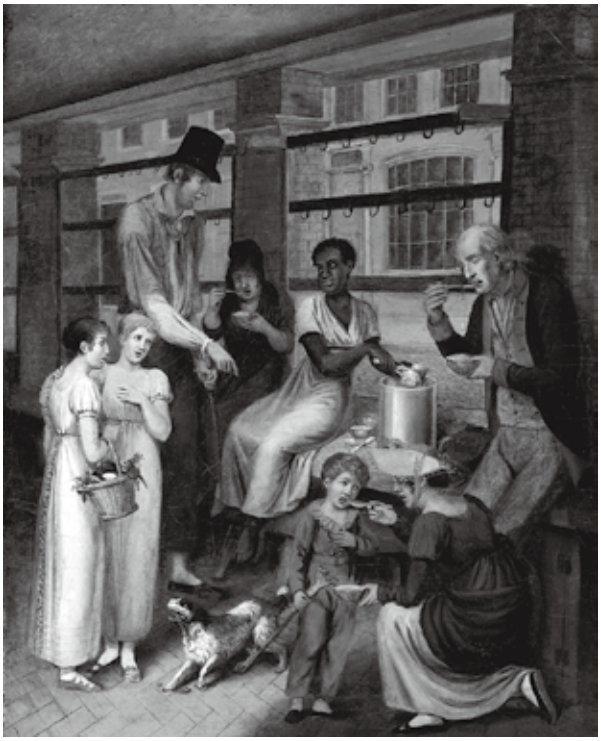
これまで筆者は、都市環境史ならびに「パブリック・エコノミー」論という観点から、18・19世紀アメリカにおける市場（いちば）の研究を行ってきた[1]。同時期の市場の風景を描いた絵画を見ていくと、少なからず、路上行商をするアフリカ系アメリカ人女性を描いたものがあることに気が付く。図１は、1811年にフィラデルフィアで描かれた『ペッパー・ポット売り』という絵であるが、中央には、市場の建物内でスープを売る黒人女性が描かれている。タイトルにもなったペッパー・ポットとは、牛の臓物を野菜とスパイスで煮込んだ洋風モツ煮込みスープのようなもので、当地のアフリカ系アメリカ人にとってはまさにソウル・フード（おふくろの味）と呼べる料理であり、また、この絵に描かれているように、老若男女を問わず白人の庶民にとっても、栄養があって小腹を満たすことが出来る、人気のファスト・フードであった[2]。

---

[1] 筆者はこれまで、19世紀アメリカ社会理解のパラダイム・シフトをもたらしたウィリアム・ノヴァックの著書『人民の福祉―19世紀アメリカにおける法と規制―』（1996年刊）William Novak, *The People's Welfare: Law and Regulation in Nineteenth-Century America*の問題提起を受け止め、18・19世紀アメリカにおける市場（いちば）の研究を行ってきた。同書の中でノヴァックは、19世紀アメリカ社会を特徴づけるものが、決してレッセフェール的な市場経済システムではなく、むしろ、こうしたシステムを抑制する「良き規制をもつ社会」well-regulated societyの理念とその実践であったことを主張した。筆者（三瓶）は、都市の市場に焦点を当てて、このノヴァックの「良き規制をもつ社会」論を検証・昇華し、新たに独自の「パブリック・エコノミー」論を展開してきた。筆者が、これまでの研究の中で明らかにしたことは、以下の点である。すなわち、19世紀アメリカの市場では、「食の安全」をめぐる規制とともに、いわゆる「モラル・エコノミー」的な「公正な価格」の理念と規制が存続していたこと―ただし「モラル・エコノミー」という言葉が前近代の残滓的な響きをもち、他方アメリカでは、「公正な価格」の理念が、資本主義社会が展開する19世紀にむしろ強化されていることから、筆者は「パブリック・エコノミー」という新たな概念を提唱している―、そしてさらに、社会的弱者、とりわけ女性に、路上行商の権利が認められることによって、弱者救済のセーフティ・ネット的機能を市場が有していたことを論じた。ただし、これまでの筆者の研究は、ニューヨーク市をはじめとした北東部地域の市場に焦点を当てていたため、路上行商の考察は、少なからず白人女性に限定されていた。本稿は、これまで充分に掘り下げることが出来なかった「市場の黒人奴隷女性」を正面にすえて考察しようとするものである。その際、黒人奴隷女性に着目することで、白人女性を対象にしては見えてこなかった「奴隷の主体的経済」との接合性を見出すことができ、またさらに、ファミリー・ヒストリーという視点を取り入れることで、従来の「奴隷の主体的経済」論では見落とされてきた、奴隷の家族形成との関連性を照射することができた。市場に関する筆者のこれまでの考察は、以下の通りである。拙稿「19世紀アメリカにおける市場法―市場規制にみる『パブリック・エコノミー』―（１）」『文学部論叢』（熊本大学）第97号、2008年（以下、「19世紀アメリカにおける市場法（１）」と略記）；拙稿「19世紀アメリカの市場」山田雅彦編『伝統ヨーロッパとその周辺の市場の歴史』清文堂、2010年；拙稿「19世紀アメリカにおける市場法―市場規制にみる『パブリック・エコノミー』―（２）」『文学部論叢』（熊本大学）第102号、2011年；拙稿「19世紀アメリカにおける市場法と都市社会―『良き規制をもつ社会』とパブリック・エコノミー―」『文学部論叢』（熊本大学）第106号、2015年；拙稿「豚と都市社会―19世紀前半のニューヨークを中心として―」『文学部論叢』（熊本大学）第108号、2017年。

[2] Helen Tangires, *Public Markets and Civic Culture in Nineteenth-Century America*, Johns Hopkins University Press, 2003, p.20.

**図１　『ペッパー・ポット売り』**



*Pepper-Pot: A Scene in the Philadelphia Market*, 1811.
Oil on canvas by John Lewis Krimmel.
Philadelphia Museum of Art:
125th Anniversary Acquisition.
Gift of Mr. and Mrs. Edward B. Leisenring, Jr., 2001, 2001-196-1.

18世紀から19世紀前半の絵画や文字史料に「当たり前の風景」として現れる、この「市場の黒人奴隷女性」とは、一体どのような人びとであったのだろうか。そして彼女たちの背後には、どのような家族の物語が存在していたのだろうか。本稿は、このささやかな問いをめぐる一つの考察を試みるものであり、そしてこうした考察を通じて、黒人奴隷の主体的生の営みを紡ぎ出そうとするものである。

最初にここで、本論の前提となる、奴隷制社会をめぐる研究史について簡単に整理しておこう。奴隷制あるいは奴隷制社会をめぐる研究は、1990年代以降、大きな転換を遂げることになった。その推進力となったのは、奴隷の「行為者としての主体性」（エージェンシー agency）への着目である。以後、この「主体性」という言葉が、奴隷制研究において重要なキーワードとなっていく。すなわち、これまで分析の対象となっていた「奴隷主の経済」“masters’ economy”（いわゆる、タバコやコメ、綿花などのプランテーション経済）に対して、黒人奴隷が、自らのイニシアティブによって、自らの利益のために作り出した非合法的な経済空間が存在していたこと、すなわち、「奴隷の主体的経済」“slaves’ economy”に光が当てられることになったのである。その際、こうした経済空間が、奴隷たちによる奴隷主との日々の「交渉」によって―この「交渉」という言葉もまた重要なキーワードである―、ダイナミックに創り出されたものであることが明らかにされ始めた。それは、かつてスタンリー・エルキンズやユージーン・ジェノヴェーゼによって強力に主張された、奴隷主の絶対的権力とヘゲモニー支配という奴隷制社会像を見直そうとするものであり、また同時に、従属的・他者依存的

な力無き犠牲者としての奴隷像を見直すものでもあった[3]。こうした流れを作り出したのは、1989年春に、メリーランド大学で行われた奴隷制社会に関するシンポジウムである。このシンポジウムの成果は、1991年に、アイラ・バーリンとフィリップ・モーガンによって論集としてまとめられたが、その論集のタイトルはまさに、『奴隷の主体的経済』*The Slaves' Economy*であった[4]。本稿は、冒頭で述べた「市場の黒人奴隷女性」の経済活動を、このような「奴隷の主体的経済」の重要な構成要素の一つとしてとらえ、さらにそれを、奴隷の家族形成の問題と関連づけて新たに考察しようとするものである。

その際、本稿では、18世紀に焦点を当て、当該期における奴隷制プランテーションの２大中心地、すなわち、チェサピーク湾地域（タバコ・プランテーション地域：メリーランド、ヴァージニア）とローカントリー地域（コメ・プランテーション地域：ノース・カロライナ、サウス・カロライナ、ジョージア）を考察の対象とする。これらの地域は、「奴隷主の経済」の典型とみなされる地域であり、それゆえ両地域において、黒人奴隷の主体的生の営みを紡ぎ出すことは、奴隷制社会を再検討する上で、重要な意味をもっている。また18世紀においては、奴隷自身が自らの言葉で綴った文字史料が非常に限られているため、史料としては、「白人による眼差し」というフィルター（偏見）の存在を常に念頭に置きながらも、奴隷所有者の日記や手紙、ならびに新聞等を用いて、奴隷の家族形成とそれを支えた「奴隷の主体的経済」の重要性を明らかにしていきたい。以上のように本稿は、18世紀を中心に、奴隷の家族形成の在り方をめぐる全体的なフレームワークを描くことを目的としており、そしてこうした考察を通じて、最終的には、黒人奴隷の “an economic and family life of their own”の輪郭を描き出したいと考えている。

## １．奴隷たちのパートナー探しと結婚

最初に、奴隷の家族形成の出発点となる問題から考察を始めていこう。そもそも奴隷の男女は、いつ、どこで、どのように出会い、パートナーを見つけたのだろうか。この奴隷の男女の出会いや恋愛の問題について、本邦における奴隷制研究は、残念ながら何も答えてはくれない。ただし、考察の手掛かりはある。これまで本邦の研究者は、奴隷制の実態を考える際、奴隷を取り締まるための法律、いわゆる「奴隷法」に着目してきた[5]。しかし、こうした奴隷法の分析から浮かび上がってくるのは、

---

3　こうした奴隷制をめぐる研究史上の一大転換については、Ira Berlin and Philip D. Morgan eds., *The Slaves' Economy: Independent Production by Slaves in the Americas*, Routledge, 1991（以下、Berlin and Morgan, *The Slaves' Economy*と略記）のIntroductionを参照されたい。また、アイラ・バーリン（落合明子、大類久恵、小原豊志訳）『アメリカの奴隷制と黒人―五世代にわたる捕囚の歴史―』明石書店、2007年（原著2003年刊）の「日本語版の出版に寄せて」並びに「序章」も参照されたい。

4　このシンポジウムのテーマは、“Cultivation and Culture: Labour and Shaping Slave Life in the Americas” である。その成果は当初、雑誌*Slavery & Abolition*の特集号（Volume 12, Issue 1, 1991）として組まれたが、その後、Berlin and Morgan, *The Slaves' Economy*として刊行された（同書の書誌情報については註３を参照）。

5　奴隷法に焦点を当てた主たる研究として、バルバドスとの比較でサウス・カロライナ植民地を論じた、西出敬一「南カロライナ黒人奴隷制の成立―カリブ型奴隷制社会としての諸特徴―」『西洋史学』第83号、1984年；ヴァージニア植民地を対象とした、池本幸三『近代奴隷制社会の史的展開―チェサピーク湾ヴァジニア植民地を中心として―』ミネルヴァ書房、1987年（以下、池本『近代奴隷制社会の史的展開』と略記）、

１つのプランテーション内に閉じ込められた、移動の自由のない奴隷の姿であった。たとえば、1695年５月に制定されたメリーランド植民地の奴隷法では、以下のことが定められている（下線は筆者による）。

> 植民地議会の助言と同意によって、そしてまたその権限によって、以下のことが定められる。いかなる黒人奴隷も、いかなる時であれ、集会のために他の場所へ出かけたり、訪問という口実でプランテーションから別のプランテーションへ出歩いたりしてはならない。奴隷が、外出したり出歩いたりした場合には、身体的罰を受けるものとする。…黒人奴隷の所有者は、いかなる口実によっても、黒人奴隷がプランテーションから別のプランテーションへ行き来することを黙認してはならない。ただし、奴隷主や監視人によって外出が認められている場合には、この法律は適用されない。その場合、奴隷主や監視人は、自らが書いた証印付きの許可証や証明書を、外出する奴隷に与えなければならない[6]。

同法では、奴隷主の許可なくプランテーションの外へ出ることは違法であり、法を破った場合には、鞭打ちをはじめとする身体的罰が奴隷に科されることが定められている。この法律に従えば、黒人奴隷は１つのプランテーションに縛られた移動の自由のない存在であり、それゆえ奴隷の男女は、同じプランテーション内でのみパートナーを探し、結婚していたことになる（あるいは、そうせざるを得なかったと言えるだろう）。しかしながら、そのようなことは果たして可能だったのだろうか。なぜならば、男女比がアンバランスであったり、結婚適齢期の若者の数が限られているプランテーションが数多く存在していたからである。こうした疑問を解くためには、法律以外の史料を渉猟しなければならないだろう。たとえば、黒人奴隷の日常を目の当たりにしていた奴隷主の日記や手紙には、こうした移動制限の問題に関して、どのようなことが記されているのだろうか。

最初に、18世紀末のヴァージニアのプランテーション経営者リチャード・パーキンソンの回顧録を取り上げてみよう。そこには、注目すべき次のような一節が記されている。

> 黒人は、日が出ている間は奴隷として使うことができるが、夜になれば、黒人たちはもはや奴隷ではない（Though you have them slaves all the day, they are not so in the night）。…私の農場で使っていた黒人はみな、毎晩出て歩き、朝になって戻って来るのが常だった[7]。

---

第６章「プランター社会の支配構造と奴隷法の形成過程」を挙げておきたい。近年では、青柳かほり氏の一連の研究が挙げられる（青柳氏の研究については、註13を参照）。

6　Bernard Christian Steiner ed., Archives of Maryland, XXXVIII (Acts of the General Assembly Hitherto Unprinted, 1694-1698, 1711-1729), 1918, pp.48-49.

7　Richard Parkinson, *A Tour in America in 1798, 1799 and 1800: Exhibiting Sketched of Society and Manners, and a Particular Account of the America System of Agriculture, with its Recent Improvements,* 1805（以下、Parkinson, *A Tour in America*と略記）, p.420; Philip D. Morgan, *Slave Counterpoint: Black Culture in the Eighteenth-Century Chesapeake and Lowcountry*, University of North Carolina Press, 1998（以下、Morgan, *Slave Counterpoint*と略記）, p.525. パーキンソンは、元々イギリスのリンカンシャー生まれの農民であったが、1798年にヴァージニアへ渡り、プランテーション経営に着手した。*A Tour in America*は、彼の３年間の農場経営に関する体験を綴ったものである。

驚くべきことに、ここでは、パーキンソンの所有する奴隷たちが、法律に関係なく毎晩出歩いていたことが記されている。それもどうやら「朝帰り」であったようだ。

同じヴァージニアのプランテーション経営者ジョン・テイラーの手紙からも、同様のことがうかがえる。この手紙は、1771年3月31日付けで、近隣の農場主ランドン・カーターに宛てられたものである。

> 私のところの黒人連中は、ほぼ毎晩、出歩き回っています。…昨晩はサビン・ホールSabine Hallでパーティがありました。…おそらく今晩は、マウント・エアリー Mt. Airyでパーティが開かれるでしょう[8]。

サビン・ホールとは、ジョン・テイラーのプランテーションの呼び名であり、マウント・エアリーは、手紙の受け取り手であるランドン・カーターのプランテーションを指している。日付から、イースターの祭りの時期であったのだろう、どうやら黒人奴隷たちは、近隣のプランテーションでパーティが開かれるたびに、夜な夜なあちこち出歩き回っていたようである。

メリーランド植民地総督フランシス・ニコラスも、上述の奴隷法制定からわずか3年後の1698年に、本国の通商拓殖院に次のような手紙を送っている。

> 土曜の夜や日曜日はもちろん、クリスマスやイースター、聖霊降臨節の2～3日間に、黒人たちが互いに訪ね合うことは、それが30～40マイルの距離であっても、当たり前のことcommon practiceなのです。実際に私は、ヴァージニアと当地（メリーランド）において、夜間に、1人から6～7人のグループまで、黒人に何度も出くわしました[9]。

日曜日や祭日はプランテーションの労働が休みであったため、その前の晩から明け方にかけてが、奴隷たちの移動のピーク時であったことが推察されるが、こうした黒人たちの外出距離が「30～40マイル」にも達し（約50～65km！）、そしてそれが「当たり前のこと」であったことは驚くべきことである。黒人奴隷のコミュニケーション空間は、想像以上に広範囲に及んでいたのではないだろうか。

こうした奴隷の外出は、植民地期のサウス・カロライナ参議会においても認識されていたようだ。筆者（三瓶）はその原史料まで当たることができなかったが、フィリップ・モーガンによれば、次のような出来事が参議会で話題になったという（モーガンが明示している議事録のナンバーから、1741－1742年の間に起きた出来事であると思われる）。それによれば、ある奴隷の集団が、日曜日の午後、2隻のカヌーを使って15マイル（約25km）ほど遠出をし、日没までに別のプランテーションにたどり着いた。この集団は、見るからにお祭り騒ぎムードを醸し出し、道すがら、他の奴隷と出くわすたびに、これから向かうプランテーションで催されるダンス・パーティへ奴隷たちを誘い、その数をどんどん増やしていったという[10]。おそらくその晩は、相当広範囲のエリアから、数多くの奴隷

---

8 John Tayloe to Landon Carter, Mar. 31, 1771, Carter Papers, University of Virginia.

9 Nicholson to the Board of Trade, Aug. 20, 1698 in William Hand Browne ed., Archives of Maryland, XXIII (Proceedings of the Council of Maryland, 1696-1698), 1903, pp.498-499. 訳内の（ ）は筆者による。

10 Morgan, *Slave Counterpoint*, p.548.

たちが集い、にぎやかなダンス・パーティが繰り広げられたに違いない。もちろん、このような外出は法的には禁止されていた。同植民地を震撼させた奴隷反乱（いわゆる「ストノ反乱」）鎮圧後の1740年に制定されたサウス・カロライナ奴隷法第36条では、「黒人奴隷が出歩き回ったり、集会を開いたりすることは、いかなる時においても、とくに土曜の夜、日曜日ならびに祝日においては認められず」、「プランテーションの外にいる奴隷を逮捕・拘束することは合法である」ことが定められていた[11]。しかしその１～２年後には、上記のような状況がすでに現れていたのである。

こうした奴隷たちの外出について、ノース・カロライナのプランテーション経営者エブニーザー・ペティグリューは、親友ジェイムズ・イルデル宛ての手紙の中で（1806年12月31日付）、次のような極めて象徴的な一節を書き記している。

> 黒人たちは、夜に無制限の自由をもっている。夜は黒人たちの時間なのだ（Night is their day）。君は僕の観察があまりにも極端だと思うかもしれないが、僕はそれが真実だと思っている[12]。

以上のような記述からわかることは、第一に、法律は全く守られていないということである。農場主の日記や手紙から浮かび上がってくるのは、むしろ逆の状況であり、奴隷たちは夜間に日常的に外出し、そしてそれは当たり前の光景であった。「夜になれば黒人たちはもはや奴隷ではない」（リチャード・パーキンソンの回顧録）のであり、黒人たちは「夜に無制限の自由」をもっており、そして「夜は黒人たちの時間」（エブニーザー・ペティグリューの手紙）なのであった。そうであるならば、黒人奴隷の男女の出会いや恋愛は、こうしたプランテーション外部への非合法的な移動の自由によって実現されたと言えるであろう。奴隷の若者たちは、１つのプランテーション内に閉じ込もるほど、決して従順でおとなしい存在ではなかった。夜ごと催される様々なイベントを通じて（それも日中の重労働の後にである！）、積極的にパートナー探しに出歩いていたのである。法の歴史的解釈において、繰り返し述べられることではあるが、法と現実は乖離していたのであり、実際、奴隷の移動禁止を定める法律が18世紀において頻繁に出されたということは、奴隷の自由を奪う取締りが一段と強化されたということではなく、むしろ逆の状況、すなわち、こうした法律が全く守られていないということ、つまり、法の形骸化を示すものとして解釈されるべきであろう[13]。ニューディール期の元奴隷のインタビューをもとに、かつての奴隷コミュニティを内側から描こうとしたジョージ・ローウィック

---

[11] 1740年サウス・カロライナ奴隷法の正式な名称は、「本植民地における黒人ならびにその他の奴隷をより良き秩序と統治下に置くための法」“An Act for the Better Ordering and Governing Negroes and Other Slaves in This Province” である。同法の全文は、以下のウェブサイトで閲覧可能。http://digital.scetv.org/teachingAmerhistory/pdfs/Transciptionof1740SlaveCodes.pdf（最終閲覧日：2022年11月10日）.

[12] Sarah McCulloh Lemon, ed., *The Pettigrew Papers*, I, Raleigh, N.C. : State Dept. of Archives and History, 1971, p.398; Morgan, *Slave Counterpoint*, p.524.

[13] この点において、奴隷法の分析から奴隷制の実態を導き出そうとする青柳かほり氏の近年の研究は、本稿のアプローチとは全く異なるものであり、法と実態の乖離に着目する本稿は、こうした青柳氏のアプローチを批判的にとらえるものである。青柳かほり「イギリス領アメリカ植民地における奴隷法（１）」『大分大学教育学部研究紀要』第40巻第２号、2019年；青柳かほり「イギリス領アメリカ植民地における奴隷法（２）」『大分大学教育学部研究紀要』第41巻第１号、2019年。

の名著は、そのタイトルが、『日没から夜明けまで』*From Sundown to Sunup* であった[14]。ローウィックは、「日没から夜明けまで」の夜という時間の中に、黒人奴隷の主体的文化形成の可能性を見出そうとしたのであるが、ここでは文化形成という高尚な問題は抜きにしても、「日没から夜明けまで」の時間に奴隷たちが、自由にプランテーションの外を出歩き、恋愛を楽しみ、パートナーを見つけ出したことは間違いないであろう。

それでは、こうして結ばれた奴隷たちの結婚とは、どのようなものであったのだろうか。実は、異なるプランテーション間でパートナーを見つけた場合、そこには1つの重大な問題が生じることになった。それは、別々のプランターが所有する奴隷が結婚した場合、プランテーションを勝手に離れて一緒に住むことが出来なかったことである。したがって、こうした奴隷の結婚の場合、「通い婚」cross-plantation marriageという形式が採られることになった。通常は夫が、妻のいるプランテーションに通っていた。ただし「通い婚」に関する史料は、かなり断片的かつ限定的であるため、現時点では、奴隷の夫婦のうち、どの程度の割合がこうした「通い婚」であったのか、それを統計的に示すことは難しい。しかし、同一プランテーション内でのアンバランスな男女数や年齢構成を考えると、「通い婚」は決して例外的なものではなかったと推測される。以下、こうした「通い婚」の事例をみていこう。

最初に、元奴隷マーシャル・マックの証言を取り上げたい。この証言は、ニューディール期に行われた元奴隷の聞き取り調査に基づくものであるため、19世紀後半の事例となってしまうが（マーシャルは1854年生まれ）、奴隷主ではなく、奴隷自らが語っている点で注目に値する。

> 父は夜こっそりと抜け出して訪ねて来ました。父は、ブルーリッジ山脈の南側にある私たちの家から、1マイル半のところに住んでいました…。父は寝過ごすと、あわてて飛び起きたものです。父が家に帰りつくまで、私たちは戸口の内側に立っていました。父がよく道の石につまずく音が聞こえました。父は、主人が呼ぶ前に帰宅しようと急いでいたからです。…大きさが3フィートぐらいの暖炉の上で、母と父はトウモロコシ・パンを焼きました。でも父はすぐに戻らなければならなかったので、帰りの道で、パンを飲み込むように平らげなければなりませんでした[15]。

ここでは、子どもの目線から、両親の「通い婚」の様子が生き生きと描かれている。この証言はヴァージニアの事例であるが、父親が発つ朝のせわしい様子は、おそらく他の場所でも同様であったに違いない。マーシャルの両親の場合は、「1マイル半」（約2.5km）の距離であったため、隣接するプランテーション間での「通い婚」と思われるが、より遠距離の場合には、日曜日の休みを利用した「週末婚」が一般的であったようだ。たとえば、ヴァージニアの元奴隷ベイリー・ワイアットは、次

---

14 G・P・ローウィック（西川進訳）『日没から夜明けまで―アメリカ黒人奴隷制の社会史―』刀水書房、1986年（原著1982年刊。以下、ローウィック『日没からの夜明けまで』と略記）。

15 Marshall Mack in Federal Writers' Project, *A Folk History of Slavery in the United States from Interviews with Former Slaves*, VIII (Oklahoma Narratives), Washington, 1941, p.212; ローウィック『日没から夜明けまで』、127頁。訳に際しては、ローウィックの訳書を参照した。83歳のマーシャル・マックのインタビューはオクラホマで行われたが、マックはここで、ヴァージニアで過ごした少年時代を語っている。

のように述べている（1866年の聞き書き）。

> 俺たちの住まいと妻の住まいのことを覚えているよ。妻の住まいは俺たちの住まいから８マイルから10マイルほど離れていたんだ。土曜日の夜に妻に会えると思って出かけると、妻はいなかった！南の方に送られてしまって、二度と戻って来なかった。…俺たちは抱き合って泣いたよ[16]。

この証言の中でベイリーは、何よりも妻を失った悲しみを述べているのであるが、同時にベイリーが、土曜の夜に、「８マイルから10マイル」もの距離（約12～16km ！）を歩いて、妻の元を訪れていたことがわかる。おそらく多くの男性奴隷が、農場での重労働の後、このように10km以上もの長い道のりを辿りながら、週末に妻の元へと向かったに違いない。

また、ノース・カロライナの元奴隷ルイーザ・アダムスの証言では、子どもたちのために奮闘する父親の姿が描き出されている。

> 私の年とった父ちゃんは、子どもを育てる食料の一部を狩猟でまかないました。父ちゃんは、兎やアライグマ、フクロウネズミを捕らえました。父ちゃんは、昼間は一日中働き、夜は狩猟をしたものでした。父ちゃんに休みなどありませんでした[17]。

---

[16] このベイリー・ワイアットの発言は、クエーカー教徒が運営するヨークタウン（ヴァージニア）の解放民学校の校長ジェイコブ・ヴァイニングJacob Viningが、1866年12月15日付のフィラデルフィア友愛協会宛ての手紙の中で、元奴隷ベイリー・ワイアットのスピーチとして記録したものである。スピーチの全文は、以下のウェブサイトで閲覧可能。“Bayley Wyat’s Speech (December 1866),” in *Encyclopedia Virginia*, https://encyclopediavirginia.org/entries/bayley-wyats-speech-december- 1866（最終閲覧日：2022年11月１日）. 訳に際しては、ヘザー・A・ウィリアムズ（樋口映美訳）『引き裂かれた家族を求めて―アメリカ黒人と奴隷制―』彩流社、2016年（原著2012年刊）、69頁を参照した（以下、ウィリアムズ『引き裂かれた家族を求めて』と略記）。

両親の「週末婚」については、ジョージア州に1856年に生まれた元奴隷ダニエル・ダウディも、次のように述べている。「父の名はジョー・ダウディといい、母はメリー・ダウディといいました。われわれ男の子は、ジョージ、スミス、ルイス、ヘンリー、ウィリアム、私、ニュウト、ジェームズとジェフの９人でした、女の子の一人は、私と双子でサラという名でした。…父は川の一方に、母は対岸に住んでいました。父は毎週、われわれを訪ねてきました」。ローウィック『日没から夜明けまで』、122－123頁。

[17] Louisa Adams in George P. Rowick, ed., *American Slave: A Composite Autobiography,* XIV (North Carolina Narratives, Part1), Greenwood Publishing Company, 1972, p.3. ルイーザの証言も、ニューディール期に行われた聞き取りである。インタビューの中で、「北軍が来た時は８歳であった」と述べていることから、ルイーザの父親のエピソードは、1860年代の回想であると思われる。訳に際しては、トーマス・L・ウェッバー（西川進監訳、竹中興慈訳）『奴隷文化の誕生』新評論、1988年（原著1978年刊）、286頁を参照した。

元奴隷チャールズ・ボールもまた、メリーランドでの幼少時代（1780年代）の思い出として、父親が家族の元へ訪ねてくる様子を次のように語っている。「土曜の晩に会いに来てくれる時、父は、いつも何かちょっとしたお土産を持ってきてくれました。…たとえば、リンゴ、メロン、サツマイモなどです。何も調達できなかった時には、乾燥させた小さなトウモロコシを持ってきてくれました。」Charles Ball, *Fifty Years in Chains: Or the Life of an American Slave*, Dayton & Asher, 1859（以下、Ball, *Fifty Years in Chains*

ここからは、農場での重労働を済ませた後、夜には狩猟に出かけ、兎などのお土産に喜ぶ子どもたちの顔を想像しながら、家族の元を訪れる男性奴隷の姿が浮かび上がってくるのである。

これらの証言は、元奴隷が直接自らの言葉で語っている点で重要ではあるものの、しかし19世紀後半の事例である。次に、間接的な史料ではあるが、18世紀後半の「通い婚」を示す幾つかの事例を取り上げたい。

１つ目は、前述したヴァージニアの農場主ランドン・カーターの日記に出てくる記述である。1770年１月の記述の中に、次のようなエピソードが語られている。ある時、カーターの所有するジミーという名の男性奴隷が、足の痛みを訴えて仕事をしばらく休んでいた。しかしカーターは、それが仮病であると疑い、次のような対処を行っている。

> 私は、彼が夜に、妻の元へ帰るのを禁止した。…なぜならば、彼は私のために働くことが出来ないのだから、嘘でもつかない限り、当然、夜に、２,３マイルも歩くことなど出来ないはずだからである[18]。

おそらく妻は、隣接するプランテーションに住んでいたのだろう、ここではジミーが、「２,３マイル」（３～５km）の距離を歩いて、「通い婚」をしていたことがうかがえるのである。

1763年９月16日付の『ジョージア・ガゼット』紙に掲載された、パトリック・マッケイなる農場主の投稿記事も、示唆的で興味深い。マッケイは、この記事の中で、夜ごとプランテーションにやって来る黒人奴隷に対して、次のような怒りを表明している。

> 私が所有するハーミテイジという名前のプランテーションは、黒人たちの騒ぎによって、ひどく耐えがたいほど悩まされている。黒人連中は、夜になると陸路や水路を使ってここにやって来る。そして、豚、家禽、羊、トウモロコシ、ジャガイモを盗み去るだけでなく、プランテーションの奴隷たちに、ひどい悪影響を与えている。すなわち連中は、プランテーションの若い女奴隷たちにチョッカイを出しているのだ。彼女たちには夫がおり、そして私の所有財産である。そしてこともあろうに、私の屋敷の娘たちにまでチョッカイを出しているのである。それゆえ私は、以下のことをすべての奴隷所有者に通達する。1763年９月16日以降、日没から夜明けまでの間に、

---

と略記）, p.12; Morgan, *Slave Counterpoint*, p.537. しかし、妻がサウス・カロライナに売却された時、ボールの父は、ショックで別人のようになったしまったようである。「父は、かつては陽気で、社交的でした」。しかし母の売却という「家族を襲った突然のすさまじい悲劇のために、そのショックから二度と立ち直ることはありませんでした」。Ball, *Fifty Years in Chains*, p.12.

[18] Jack P. Greene, ed., *The Diary of Colonel Landon Carter of Sabine Hall, 1752-1778*, University Press of Virginia, 1965（以下、*The Diary of Landon Carter*と略記）, p.348; Morgan, *Slave Counterpoint*, p.525.
また、「ヴァージニア生まれの黒人ピーター」に関する逃亡奴隷広告を見ると、次のような記述がある。「ピーターは、沢山の衣服を…ボウラー・コーク大佐の所有するプランテーションへ運び込んでいた。そこには、しばらく一緒に暮らしていた妻がいたからである」。 John Hales, *Virginia Gazette*, April 1, 1775 (Peter). ピーターは、自分の衣服を妻の家に預けていたようだ。こうしたことから奴隷の夫婦は、たとえ別居であっても、一つの家庭を営んでいたことがわかる。おそらく、家財道具なども共有していたのではないだろうか。

私のプランテーションの柵内に侵入した黒人はすべて、泥棒、盗人、財産侵害者とみなし、容赦なく発砲する。…

パトリック・マッケイ [19]

ここでも黒人奴隷たちが、夜の外出を自由に行っていたことがうかがえる。外出の目的は、奴隷主からみれば不道徳かつ破廉恥なものであったが、奴隷の側からすれば、自由に恋愛を楽しんだり、積極的に恋人を見つけようとする行動であっただろう。ここでは、「チョッカイ」を出された女奴隷について、マッケイが、「彼女たちには夫がおり」と述べていることに着目したい。「チョッカイ」を出した男性奴隷が、相手に夫がいることを知っていたかどうかはわからないが、少なくともこの女性たちの家には、夫が不在であったと考えられるのである。このことは、彼女たちの夫が、「通い婚」であることを示しているのではないだろうか。

最後に、前述したヴァージニアの農場主リチャード・パーキンソンの回顧録を再び取り上げたい。そこには、次のような「通い婚」に関する貴重な記述がみられる。

黒人が、土曜の夜に妻に会いに出かけることは、普通のことusual practiceである。妻は夫の住居からある程度離れたところに住んでいたので、夫たちは、妻に会いに行く際、誰かの馬を使って10～14マイルほどの距離を移動する…このことは、法律違反としては軽微であるため、夫たちがそのために罰せられたなどということは、私は一度も聞いたことがない[20]。

ここからも「通い婚」は「普通のこと」であり、そして黒人奴隷の外出を禁止する法律が、ここでも有名無実化していたことがわかる。さらに、遠距離の「通い婚」の場合、馬が利用されていたという指摘は興味深く、おそらく奴隷の中には、馬を所有する者がいたのではないだろうか（こうした奴隷の財産所有については、後の節であらためて考察したい）[21]。

いずれにせよ「通い婚」は、奴隷の結婚の形態を示す、１つの重要な特徴であったと言えるであろう。本節の冒頭で、「私の農場で使っていた黒人はみな、毎晩出て歩き、朝になって戻って来るの

---

19 Hermitage (Patrick Mackay) , *Georgia Gazette*, Sept.22, 1763.
奴隷たちの中には、こうした「通い婚」の下で、複数の女性と親密な関係をもっていた男性奴隷もいたようである。たとえば、逃亡奴隷広告の記事によると、ヴァージニアの「ケンブリッジという名の奴隷は…船頭として良く知られた人物であり…ランパンノック川、マタポニー川、そしてパムンキー川のすべての船着き場に、妻をもっていた」。 John Holladay, *Virginia Gazette*, April 21, 1768 (Cambridge); Morgan, Slave Counterpoint, p.536. 同じくヴァージニアの「ビリー・バーバーという名の奴隷は…歳は30～32歳で…ノーフォークに妻を、ハンプトンには別の妻を、そしてウルバナには３人目の妻をもっていた」。 Bennett Browne, *Virginia Gazette*, July 15, 1775 (Billy Barber); Morgan, *Slave Counterpoint*, p.536. 残念ながら、女性奴隷については、こうした複数の恋愛を示す記事を今のところは見つけてはいない。しかし、こうした情事も含めて、奴隷たちは実に「ヒューマン」な存在であったのである。

20 Parkinson, *A Tour in America*, p.448.

21 もちろん、奴隷主が所有する馬を勝手に使っている場合もあったであろう。たとえば、ヴァージニアの農場主ランドン・カーターの日記には、「夜になると奴隷たちは、勝手に馬を乗り回す」という記述がみられる。*The Diary of Landon Carter*, p.442.

が常だった」という農場主の証言を引用したが、おそらく奴隷たちの「朝帰り」の中には、夫婦間での「通い婚」も含まれていたと思われる。

ここで、「通い婚」と並ぶ、奴隷の結婚のもう一つの重要な特徴を述べておきたい。それは、奴隷の結婚が「事実婚」であったということである。周知の通り奴隷の結婚は、法的には何ら効力をもたないものであった。奴隷は法的に動産（モノ）であり、モノ同士の結婚なるものは、そもそも法律で認められていなかったからである。たとえば、1848 年にジョン・オニールがまとめた『サウス・カロライナ奴隷法要覧』においては、1740年サウス・カロライナ奴隷法第 1 条の「奴隷は動産である」を前提に、奴隷の結婚について次のような説明がなされている。

> 当然のことながら、法律上、奴隷は結婚の契約をすることができない。結婚は、道徳上、望ましいものではある。しかし法律上は、奴隷と奴隷の結婚、あるいは奴隷と自由黒人の結婚は、単なる内縁でしかない[22]。

このように奴隷の結婚は、法的に認められていない非公式なものであったが、しかし結婚という形式が、奴隷たちの間で軽んじられていたわけではなかった。この点についてここでは、スコットランド人ジェイムズ・バークレーのアメリカ滞在記の記述を取り上げてみよう。18歳の時（1770年）にアメリカへ渡ったバークレーは、約 2 年間、サウス・カロライナのプランテーションで監視人として働いた経験をもつ。この時に目にした奴隷の結婚の様子を、バークレーは次のように語っている。

> 黒人の結婚は、夜に行われる。なぜならば日中は、主人のために働かなければならないからだ。結婚するカップルがその土地で良く知られている場合、大勢の男たちや女たち、そして子どもたちが、近隣のプランテーションから集まってくる。その数は、数百人にも達するだろう。祝宴のため、奴隷たちは通常、肥えた数匹の陸亀を用意し、また奴隷主は、お祝いとして 1 頭か 2 頭の豚を振る舞った。奴隷たちはまた、日曜日の労働で得た稼ぎで、ラム酒を提供した。結婚に際しては、特別な儀式が行われるわけではないが、結婚した 2 人は、正式に自分たちが夫と妻になったことを認識する。その日は夜を徹して、飲み食いや歌、ダンス、どんちゃん騒ぎが繰り広げられる。そして食べ物や飲み物がなくなると、みなは家に帰り始めるのであった。一度、（奴隷主の）豚を管理していた奴隷が、祝宴のために、（奴隷主の）数頭の豚を盗み出したことがあった…奴隷主たちは、奴隷の結婚には全く関心をもっておらず、こうした祝宴に干渉することも全くなかった[23]。

---

22 John Belton O'Neall, *The Negro Low of South Carolina*, 1848, p.23.

23 James Barclay, *The Voyages and Travels of James Barclay, Containing Many Surprising Adventures, and Interesting Narratives*, 1777, p.27. 訳中の（ ）は筆者による。このバークレーのアメリカ滞在記は、奴隷制関連の史料集である、Timothy Lockley ed., *Slavery in North America*, Vol.1, Routledge, 2008に収録されている。通常、分散する複数の地所（プランテーション）を経営する奴隷主（農場経営者）は、地所ごとに、バークレーのような監視人 overseer（農場管理人）を雇った。この監視人の下に、奴隷監督者 driver と呼ばれる現場監督がいた。

この記述には幾つかの注目すべき点があるが、ここでは何よりも、法的には「事実婚」であっても、結婚する２人が、夫婦となることを自らの属するコミュニティの人々に示し、家族や友人の祝福と承認を受ける「披露宴」のようなものを開いていたことは重要であろう。すなわち、結婚という行為は、それなりの重みをもっていたように思われるのである。また祝宴のために、「数百人」もの奴隷が集まっていたことにも注目したい。もちろん、奴隷の外出と集会は法的には禁止されていたが、ここでも、法と実態は乖離していたのであった[24]。

それでは、こうした奴隷の結婚に対して、奴隷主の姿勢はどのようなものであったのだろうか。バークレーの記述にみられるように、祝宴に対してはそれほど関心が無かったようだが、しかし結婚に対しては、奴隷主はこれを黙認あるいは推奨し、「通い婚」のための外出許可証を付与したりした。その理由は、ヒューマニズムや温情主義というよりもむしろ、ビジネス的打算に基づくものであったと考えられている。すなわち、奴隷法の規定に従えば、夫婦間に子どもが生まれた場合、その子どもは母親を所有する奴隷主の財産となったため（たとえば1740年サウス・カロライナ奴隷法第１条）、結婚を通じた子どもの誕生は、奴隷主の資産の増加を意味したのである。奴隷の価値を正確に計算することは難しいが、1770年代前半において奴隷１人当たりの平均価格は、自由人労働者の平均年収額の２倍以上にも達していた[25]。子どもが生まれることは、こうした相当額の資産を奴隷主が手に入れることを意味したのである。このような資産の増殖という観点から、奴隷主の権力やヘゲモニーを重視するかつての研究では、奴隷の結婚を奴隷主による強制的なもの、すなわち、奴隷主は家畜を殖やすように奴隷を強制的に「つがい」にして「ブリーディング」breedingを行った―「黒人男性は種馬、黒人女性は出産を強制」―ということが強調されてきたように思われる[26]。もちろん、そのような事例が皆無であった訳ではないが、しかしこうした議論は、奴隷制の過酷さや悲惨さを強調するあまり、逆に奴隷自身の主体性を無視してしまっている。これまで考察してきたように、奴隷たちの多くは、非合法的な移動の自由を行使しながら、自ら積極的にパートナーを探し、そしてたとえ「通い婚」になろうとも、２人の合意に基づいて結婚という形式を選択し、自ら家族を形成したと考えられるのである。

---

24　祝宴のために、奴隷主の豚が盗み出されたことも興味深い。おそらく奴隷主は、「ご祝儀」の義務（「１, ２頭の豚を振る舞う」）を怠っていたのだろう。奴隷たちからすればそれは「盗み」ではなく、当然の権利の行使であったのかもしれない。また奴隷たちが、「日曜日の労働で得た稼ぎ」をもっていたことにも着目したい。奴隷が「稼ぎ」をもっていた―すなわち貨幣を所有していた―ことは、後の節であらためて考察する。

25　1773－1775年の奴隷１人当たりの平均価格は約44ポンド（＝約195ドル）であり、1774年における13植民地の自由労働者の平均年収は約19ポンド（＝約84ドル）であった。奴隷の平均価格については、“Average price paid in the Thirteen Colonies for slaves from Britain’s American colonies and West Africa from 1638 to 1775,” in *Statista*, https://www.statista.com/statistics/1069716/british-american-west-african-slave-prices/（最終閲覧日：2022年11月10日）を参照した。また、自由労働者の平均年収については、Peter H. Lindert and Jeffrey G. Williamson, “American Colonial Incomes, 1650-1774,” National Bureau of Economic Research, 2014, Table 1, in https://www.nber.org/system/files/working_papers/w19861/w19861.pdf（最終閲覧日：2022年11月10日）を参照した。

26　たとえば近年においても、マリリン・ヤーロム（林ゆう子訳）『〈妻〉の歴史』慶應義塾大学出版会、2006年（原著2001年刊）、270－272頁では、こうした見解が強調されている。

## Ⅱ．家族の離散に抗う

しかしながら、結婚後に奴隷たちが安定した家族生活を送ることが出来たかというと、もちろん、そうではない。奴隷たちは常に、家族のメンバーがいつ何時奴隷主に売り飛ばされるかもしれないという、家族離散の不安と闘っていた。ヘザー・ウィリアムズは、その著書『引き裂かれた家族を求めて』の中で、「感情史」という新たなアプローチを用いながら、元奴隷の証言や手紙、新聞記事などを手掛かりに、19世紀における家族離散の問題を見事に描き出している[27]。元奴隷が自らの人生を語る多くの証言からは、子どもの時に経験した家族との別れが、いかに深い心傷と喪失感をもたらすものであったのかが浮かび上がってくる。ここではその事例として、1806年にノース・カロライナに生まれた元奴隷トマス・ジョーンズの証言を紹介したい。トマスは９歳の時に売られ（家族から引き離され）、その後22歳の時に母親と再会することが出来たのだが、その時の様子を次のように語っている。

> 家族はバラバラになっていました。…父は売られていなくなっていたし、（兄弟姉妹の）リチャード、アレグザンダー、チャールズ、セラ、そしてジョンも売られてしまっていました。母は、まだ若いのに老けて見えました。悲しみに打ちひしがれ、すっかり希望を失って、弱くなって、死にかけて、それでも１人でそこに残っていました。私はそんな母に会って、その胸に抱かれてもう一度涙を流しました[28]。

もちろん、このような家族の離散に直面して、奴隷たちは、ただじっと耐え忍んでいたわけではなかった。家族の離散に抗うため、様々な形の行動を試みたのである。リスクを伴う選択肢ではあったが、その一つが、家族の元への「逃亡」であった。

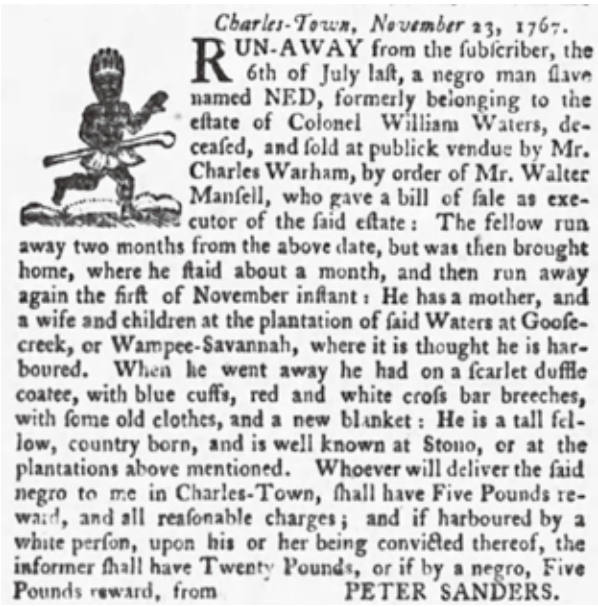
図２は、1767年11月24日付の『サウス・カロライナ・ガゼット・アンド・カントリー・ジャーナル』紙に掲載された、いわゆる「逃亡奴隷広告」と呼ばれるものである。この中でチャールズ・タウンの奴隷主ピーター・サンダースは、逃亡した奴隷ネッドを捕まえるために次のような広告を打っている。

---

27 ウィリアムズ『引き裂かれた家族を求めて』（書誌情報に関しては、註16を参照）。

28 ウィリアムズ『引き裂かれた家族を求めて』、79頁；Thomas H. Jones, *The Experience of Rev. Thomas H. Jones, Who Was a Slave for Forty-Three Years*, Boston, 1862, p.9. 訳中の（ ）は筆者による。

**図２　逃亡奴隷の新聞広告―ネッドNedの場合―**



*Charles-Town, November* 23, 1767.

RUN-AWAY from the ſubſcriber, the 6th of July laſt, a negro man ſlave named NED, formerly belonging to the eſtate of Colonel William Waters, deceaſed, and ſold at publick vendue by Mr. Charles Warham, by order of Mr. Walter Manſell, who gave a bill of ſale as executor of the ſaid eſtate: The fellow run away two months from the above date, but was then brought home, where he ſtaid about a month, and then run away again the firſt of November inſtant: He has a mother, and a wife and children at the plantation of ſaid Waters at Gooſe-creek, or Wampee-Savannah, where it is thought he is harboured. When he went away he had on a ſcarlet duffle coatee, with blue cuffs, red and white croſs bar breeches, with ſome old clothes, and a new blanket: He is a tall fellow, country born, and is well known at Stono, or at the plantations above mentioned. Whoever will deliver the ſaid negro to me in Charles-Town, ſhall have Five Pounds reward, and all reaſonable charges; and if harboured by a white perſon, upon his or her being convicted thereof, the informer ſhall have Twenty Pounds, or if by a negro, Five Pounds reward, from PETER SANDERS.

*South-Carolina Gazette; and Country Journal*, Nov. 24, 1767.

チャールズ・タウン、1767年11月23日

逃亡奴隷の情報を求む。逃亡日は７月６日。黒人の男で名前はネッド。以前はウィリアム・ウォーターズ大佐のプランテーションの奴隷であった。…この男は、上記の日から２か月間逃亡していたが、一度（見つかって）連れ戻された。その後、ひと月ほどおとなしくしていたが、しかし11月１日に再び逃亡した。上記のグースクリークのウォーターズ・プランテーションには、ネッドの母親、そして妻と子どもたちがいる。おそらくネッドは、グースクリーク、ワンピー、サヴァンナのどこかに、身を潜めていると思われる。逃亡時には、真紅のダッフル・コートと青いカフスを身に着け、紅白の縞模様のブリーチズを履いていた。古着と新しいブランケットも持っている。この男は背が高く、植民地生まれであり、ストノでは良く知られた顔であり、上記のプランテーションでもそうである。この黒人をチャールズ・タウンの当方まで連れ戻してくれた場合、５ポンドの報酬と適切な経費を支払いたい。この男を白人がかくまっている場合、その白人の有罪が確定次第、情報提供者には20ポンドを支払いたい。黒人がかくまっている場合、報酬は５ポンドである。

ピーター・サンダース[29]

少し長い引用となったが、この広告から、黒人奴隷ネッドが２度も逃亡を試み、そしてその目的が、母親と妻子に会うためであったことがわかる（少なくとも奴隷主はそのように考えていた）。また、潜伏先の可能性が高いグースクリークやストノは、奴隷主サンダースが住むチャールズ・タウンから

[29] Peter Sanders, *South-Carolina Gazette; and Country Journal*, Nov. 24, 1767 (Ned). 訳中の（ ）は筆者による。

北と南にそれぞれ30km以上離れており、さらにサヴァンナは130km以上も離れている。これらの地域でネッドが「良く知られた顔」であったことは、ネッドの精通するエリア―日常的な行動範囲でもあり、逃亡に際して様々な支援を得られるエリア―が、かなり広範囲であったことを示している[30]。このことは、前節で述べた奴隷のコミュニケーション空間の広さを裏付けるものであろう。

逃亡奴隷広告には、子どもも含まれていた。次の２つの事例は、サウス・カロライナ植民地の新聞に掲載されたものである。

> ８月６日に黒人の少年が逃亡。名前はジャック。12歳。…おそらく父親のキューピッドの元へ逃げたと思われる。キューピッドは、チャールズ・タウンのトマス・ライト氏の奴隷である。…
>
> ジョン・ランパート[31]

> チャールストンから５月23日に逃亡。小柄な黒人の少年で10歳。名前はフランク。茶褐色の馬に乗って逃亡…生まれ育ったコロンビアに向かって逃げたと思われる。少年と馬の両方あるいはどちらかを連れ戻してくれた場合には、それなりの報酬を支払いたい。…
>
> ５月25日[32]

淡々とした逃亡奴隷広告の記述とは裏腹に、わずか10～12歳の少年が、家族から引き離され、両親に会うために逃亡するというエピソードは心打つものがある。とくにフランクの場合、チャールストンからコロンビアまでは190kmもあり、たとえ馬に乗ってであったとしても、地理に明るくない（そして知人のサポートなどない）子どもが、両親の元へ戻るには、相当の困難とリスクがあったのではないだろうか。

次に、サウス・カロライナ植民地の新聞に掲載された、女性の逃亡奴隷の事例を２つ紹介したい。

> ９月21日に逃亡。中背の若い黒人女。名前はベティ。植民地生まれ。ベティは、ホブコウにあるジョン・ローズ氏のプランテーションに父と母がおり、ワンド・ネックにある未婚の女主人ホリブッシュ氏のプランテーションには夫がいる。したがって、そのどちらかに逃げたと思われるが、しかしまだこの町（チャールストン）にいる可能性が最も高い…
>
> 1768年10月17日　メアリー・ストロークス[33]

---

30　ネッドが「真紅のダッフル・コートと青いカフスを身に着け、紅白の縞模様のブリーチズを履いていた」とあるように、逃亡奴隷広告は、奴隷の服装やファッションを考察する上でも重要な史料である。通常、逃亡奴隷は、自由黒人を装うために、自身の所有する最も良い服を着て逃亡を試みた。

他方で、池本幸三、布留川正博、下山晃『近代世界と奴隷制―大西洋システムの中で―』人文書院、1995年（以下、池本、布留川、下山『近代世界と奴隷制』と略記）は、奴隷法の規定に従って、奴隷には最低限の衣料しか「保証」されておらず、それゆえ、奴隷の衣類が粗末を極めたことを強調しているが（237-240頁）、しかし逃亡奴隷広告の記述から明らかであるのは、奴隷たちは、「奴隷の主体的経済」を通じて、多くの衣服を所有していたことである。たとえば註34の事例を参照。

31　John Lampert, *South-Carolina Gazette*, Aug. 23, 1760 (Jack); Morgan, *Slave Counterpoint*, p.528.

32　*City-Gazette*, June 20, 1797 (Frank). 1783年にチャールズ・タウンは、チャールストンに名称を変更した。

33　Mary Strokes, *South-Carolina Gazette; and Country Journal*, Oct. 25, 1768 (Betty). 訳中の（ ）は筆者によ

報奨金20シリング

11日の月曜日に逃亡。若い黒人の女。名前はローズ。逃亡時は手織りの白いジャケットとコートを着ていたが、かなりの数の衣服をもって逃げたため、着替えをして自由人を装っているはずである。以前彼女は、キング通りのクローリー氏の奴隷であり、夫がいた。夫の名前はイズラエルであり、ウィルマン氏の奴隷である。この女は、夫を非常に愛していた。ローズには、２本の突起の付いた鉄の首輪がついている…

S・スパー[34]

これらの広告に見られるように、妻が夫の元へ逃亡する事例も、決して珍しいものではなかった。とくにローズの場合は―もちろん逃亡先を断定することはできないが―、奴隷主によって何かの罰を受けたのだろう、「２本の突起の付いた鉄の首輪」を着けたまま、「愛していた」夫の元へ向かったと考えられるのである。

18世紀の逃亡奴隷広告の分析を行ったフィリップ・モーガンによると、奴隷が逃亡を試みる最大の理由は、引き裂かれた家族や友人（恋人を含む）に会うためであった。たとえば、1732年から1782年までのサウス・カロライナにおける逃亡奴隷広告1,056件のうち、家族や友人に会うために逃亡した奴隷の数は733件であり、全体の約70％にも達していた。この数字は、自由そのものを求めて逃亡した奴隷の数（192件、全体の約18％）の４倍近い大きさである。同様に、メリーランド南部やヴァージニアを含むチェサピーク湾においても、広告に掲載された逃亡奴隷のおよそ半数が、家族や友人に会うための逃亡であったことが指摘されている[35]。このことから、奴隷の逃亡とは、「自由を求めた奴隷制そのものへの闘い」といったヒロイズム的行動ではなく―それは全体の一部でしかない―[36]、何よりもまず、失われた家族との絆を取り戻すための行動であったと考えられるのである。

---

る。ホブコウは、チャールズ・タウンから北へ100km、ワンドは北へ25kmほど離れている。

34 S. Spurr, *City-Gazette*, June 20, 1797 (Rose); Morgan, *Slave Counterpoint*, p.527. ローズが「かなりの数の衣服をもって」いたことにも着目したい。このことは、奴隷の財産所有を示している。

35 Morgan, *Slave Counterpoint*, pp.526-527, and fn.45, 47, 48; Philip D. Morgan, “Black Society in the Lowcountry,” in Ira Berlin and Ronald Hoffman, eds., *Slavery and Freedom in the Age of the American Revolution*, University Press of Virginia, 1983, p.127 and Table18; Philip D. Morgan, “Colonial South Carolina Runaways: Their Significance for Slave Culture,” *Slavery & Abolition*, VI, 1985, Table 6. より詳細な内訳としては、1732年から1782年までのサウス・カロライナにおける逃亡奴隷広告1,056件のうち、323件（31％）が、友人等を除く家族（妻、夫、親、子ども、兄弟姉妹）に会うための逃亡であった。同様に、1736年から1779年までのヴァージニアにおける逃亡奴隷広告370件のうち、110件（30％）が、友人等を除く家族に会うための逃亡であった。Morgan, *Slave Counterpoint*, p.528, fn.47, 48. また、クリコフによれば、1745年から1779年のメリーランドの逃亡奴隷広告のうち、54％が家族や友人等に会うための逃亡であった。Allan Kulikoff, *Tabacco and Slaves: The Development of Southern Cultures in the Chesapeake, 1680-1800*, University of North Carolina Press, p.379.

36 たとえば、池本、布留川、下山『近代世界と奴隷制』では、奴隷の逃亡を「奴隷のレジスタンス」として位置づけている（250-254頁）。こうした見解の背景には、南北戦争以前における「地下鉄道」（奴隷の逃亡を支援する奴隷制廃止主義者の活動）に対するヒロイズム的評価（虐げられた奴隷たちの自由と解放のために生命を賭したという評価）が、投影されているのではないだろうか。また、池本『近代奴隷制社会の史的展開』「第９章 ヴァジニア黒人奴隷の適応と抵抗」では、「妻や肉親、親戚への訪問」を目的とした逃亡が

このことは、奴隷自身にとって「家族」というものが、奴隷制をめぐる問題の中心に位置していたこと示している。

このような「逃亡」以外に、実はもう一つ、家族の離散に抗う、より永続的で合法的な手段が存在していた。それは、奴隷主から「家族の自由身分を買い取る」（それによって家族を自由人にする）ことであった。もちろんプランテーションでの労働は無給であるため、奴隷が「家族の自由身分を買い取る」ためには、何らかの方法で貨幣を手に入れる必要があった。それでは一体、どのようにして奴隷は金を稼ぐことが出来たのだろうか。

通常、プランテーションの経営者は、奴隷にかかる食料費を節約するため、奴隷に対して菜園や畑作のための断片的な農地（“negro grounds”と呼ばれた）を与え、食料の一部を奴隷自らに生産させていた。「奴隷の主体的経済」論によって明らかとなった成果の一つは、奴隷たちが、この与えられた菜園や農地を、奴隷主の意図とは異なる形で利用し、自らの創意工夫によって農作物や家畜の多様化を推し進め、そしてそれらを近隣の市場で販売していたことである[37]。すなわち、「菜園と市場販売との結合」garden-marketing complexによって、奴隷たちは貨幣を手にすることが出来たのであった。

たとえば、1751年に、ルター派の牧師ヨハン・ボルジウスは、サウス・カロライナやジョージアにおける奴隷のこうした経済活動について、次のように書き記している。

---

指摘されているが、しかし同章での分析の力点は、逃亡した「文化変容奴隷」と「未変容奴隷」との比較分析に置かれており、家族史的視点は非常に弱い。和田光弘『紫煙と帝国―アメリカ南部タバコ植民地の社会と経済―』名古屋大学出版会、2000年、「第７章 逃亡する奴隷たち―新聞広告の語る人種奴隷制―」では、18世紀におけるメリーランドとジョージアの逃亡奴隷広告が考察されているが、しかしそこでの分析の力点も、逃亡奴隷の年次変化、性別、年齢、人種、日時、人数、最高賞金額に置かれており、奴隷の家族史という視点は全くない。それゆえ、和田氏による分析も、「黒人自らが自由を得るために立ち上がる事例」（315頁）、「黒人の人間としての抵抗の端的な証」（315頁）として、逃亡奴隷の動機を想定しているように思われる。

37 この問題に関する先駆的研究として、Philip D. Morgan, “Work and Culture: The Task System and the World of Lowcountry Blacks, 1700-1880,” *William and Mary Quarterly*, 3rd series, 39, 1982が挙げられる。「奴隷の主体的経済」論については、註３で言及したBerlin and Morgan, *The Slaves' Economy* を参照されたい。

19世紀アンティベラム期を中心に、奴隷の「自立的生産活動」に着目した本邦における先駆的研究として、沼岡努氏の一連の研究を挙げておきたい。ただし沼岡氏は、奴隷主によるプランテーション経営の管理・合理化という側面を重視し、かつ、「集団/共同奴隷耕作地」に焦点を置いている。沼岡努「アンティベラム南部奴隷制下における『奴隷耕作地』再考（１）」『新潟産業大学経済学部紀要』第19号、1998年；同「集団/共同奴隷耕作地―その実態及び歴史的役割―」『新潟産業大学経済学部紀要』第36号、2009年；同「奴隷共用菜園・野菜畑の歴史的展開及びその役割―集団/共同奴隷耕作地の全体像解明に向けて―」『新潟産業大学経済学部紀要』第38号､2010年；同「モンティチェロ・プランテーションに見られる奴隷の生産物取引」『新潟産業大学経済学部紀要』第47号、2016年。また、沼岡努「豚、奴隷、家畜商がつくり出したもうひとつの世界」『新潟産業大学経済学部紀要』第48号、2017年では、開放耕地制下での奴隷による豚の肥育が興味深く描かれている。アイルランド系移民による開放耕地制下での家畜の肥育と、黒人奴隷によるこうした慣習の共有は、筆者（三瓶）が以前考察した、都市で放し飼いにされている豚の問題（パブリック・コモンとしての路上）を考える上で非常に興味深い。拙稿「豚と都市社会―19世紀前半のニューヨークを中心として―」『文学部論叢』（熊本大学）第108号、2017年。

奴隷たちは、自由に耕すことができる土地を与えられている。その土地で奴隷たちは、トウモロコシ、ジャガイモ、タバコ、ピーナッツ、スイカ、メロン、カボチャ、ボトル・パンプキン―甘く臭いの強いカボチャの一種で、通常はミルクや飲み物の容器として使われる―を、自らのために生産している。こうした土地での耕作は、日曜日に行われる。…奴隷たちは、これらの作物を売って、必要なものを購入しているのである[38]。

ここからも、奴隷たちが「自由に耕すことができる土地」をもっており、多様な農作物の生産と販売を通じて、「必要なものを購入する」貨幣を手に入れていたことがわかる。また、日曜日が、自らのために耕作する大事な労働日であったことにも着目しておきたい。たとえば、1712年に、安息日遵守を求めるサウス・カロライナの聖公会宣教師が、日曜日の労働を止めるよう、繰り返し命令を出したが、それに対して奴隷たちは、「日曜日の午後に、自らのために働く自由を否定することは不当である」として、安息日遵守の命令を無視し続けたのであった[39]。このように、「奴隷の主体的経済」が、日曜日の労働をめぐって教会と対立する側面をもっていたことは興味深い。

また、ノース・カロライナを訪れたスコットランド人女性ジャネット・ショーも、1775年に、奴隷の経済活動について次のような記述を残している。

黒人奴隷には、１日当り１クォートのトウモロコシが支給され、また、小さな土地が与えられています。奴隷たちの畑は、奴隷主のものよりも、はるかに見事です。奴隷たちは、そこで豚や家禽を飼い、カラバッシュ（ひょうたん）なども植えたりしています。そのため奴隷たちは、白人の貧しい人々よりも、あらゆる点で豊かな状況にあります[40]。

---

38 Klaus Gloewald, Beverly Starika, and Pail S. Taylor, ed. and trans., “Johann Martin Bolzius Answers a Questionnaire on Carolina and Georgia,” *William and Mary Quarterly*, 3rd series, Vol.14, No.2, 1957, pp.259-260; Robert Olwell, *Masters, Slaves, and Subjects: The Culture of Power in the South Carolina Low Country, 1740-1790*, Cornell University Press, 1998（以下、Olwell, *Masters, Slaves, and Subjects*と略記）, p.146. ボルジウスは、ドイツのルーサティア（ラウジッツ）生まれのルター派の牧師であり、1735年から1765年までの30年にわたり、ザルツブルク移民がジョージア植民地に築いたプロテスタント・コミュニティの牧師を務めた。この史料は、ボルジウスが、アウクスブルクのルター派コミュニティに対して書き送った、ローカントリー地域の奴隷制に関する書簡である。Ibid., pp.219-221.

39 Olwell, *Masters, Slaves, and Subjects*, p.146. また、前節で取り上げたジェイムズ・バークレーの結婚式の描写においても、「奴隷たちは…日曜日の労働で得た稼ぎで、ラム酒を提供した」ことが述べられている。

40 Evangeline Walker Andrews and Charles McLean Andrews, eds., *Journal of a Lady of Quality; being the narrative of a journey from Scotland to the West Indies, North Carolina, and Portugal, in the years 1774 to 1776*, Yale University Press, 1923, pp.176-177. 訳中の（ ）は筆者による。ジャネット・ショーは、1774年から２年間にわたって、カリブ海地域と北米を旅したスコットランド人女性である。 *Journal of a Lady of Quality*は、彼女による旅行記である。

奴隷が有していた農民としての優れた資質については、ヴァージニアのプランテーション経営者リチャード・パーキンソンも、同様の観察を行っている。「黒人たちは、どのような白人よりも、太陽の光を強く浴びてきた。そのため、白人よりも鍬を扱うのが上手く、いかなる耕作についても優れている。トウモロコシをむしる作業については、いかなる白人も、黒人の足元にも及ばないと私は実感している。このことは、耕作に関することすべてに当てはまる。アメリカにおいては、白人というものは全く当てにならない。そのため、奴隷なしでは何も進まないのである」。 Parkinson, *A Tour in America*, p.421.

ここでは、当地の奴隷が、奴隷主のものよりも「はるかに見事で」手入れの行き届いた自分自身の畑をもっており、そのため近隣の貧しい白人たちよりも「豊か」な暮らしをしていることが指摘されている。おそらく奴隷の中には、シドニー・ミンツが「プロト・ペザントリー」proto peasantyと呼んだ「小農民的状況」を、すでに自ら生み出している奴隷がいたのではないだろうか[41]。

このように奴隷たちは、「奴隷主の経済」（プランテーション経済）の内側から、自分たちのための経済空間を切り拓いていったのだが、しかしそれでも、「家族の自由身分を買い取る」ほどの大金を―それは自由人労働者の平均年収額の2倍以上にも達するものであった！―、このような野菜や家畜を売ることによって、本当に手に入れることは出来たのであろうか。

この問題について、2人のヴァージニアの黒人奴隷女性ソフィアとアリシアの事例は、「菜園と市場販売との結合」が、実際に「家族の自由身分の買い取り」を可能にさせたことを示す、貴重な事例である。この2人の女性は、連邦議会上院に1868年に提出された教育委員会特別報告書の中で、黒人教育に尽力した功労者として詳述されたため、例外的に多くのことがわかっている。以下、少し長めではあるが、最初にソフィアについての記述を取り上げてみよう（下線は筆者による）。

> ソフィアは、市場向けの菜園をもっており、市場の開催日には毎日、アレグザンドリアの市場へ通っていた。ソフィアには、3人の息子と1人の娘がいた。市場での商いによって彼女は、奴隷主に知られることなく400ドルを貯めた。…ソフィアは、貯めた金をメソジストの牧師に委託し、この牧師は、その金でソフィアの夫ジョージ・ベルの自由を買い取った。その後すぐにソフィアは重い病気にかかり、メリーランド通貨でわずか5ポンドの値段で、夫のジョージによって買い取られた。この夫婦による自由身分の買い取りは、黒人学校の建物が出来る約6年前（1800年ごろ）のことであった。奴隷として生まれた息子のうち2人は、数年後に父親が買い取った。もう一人の息子は、ワシントンで不慮の死を遂げた。娘については、娘の女主人が手放そうとはしなかったため、夫婦は買い戻すことができなかった。しかし女主人が亡くなった際、遺言で娘は自由身分となった。…2人の息子は、それぞれ750ドルと450ドルで買い取られた。…ジョージ・ベルは、1843年に、82歳で亡くなった。彼の妻ソフィアも、その数年後に86歳で亡くなった[42]。

このソフィアについての記述は、多くのことを示唆してくれるのだが、ここではまず何よりもソフィアが、アレグザンドリアの市場で野菜を売ることによって、400ドルもの大金を貯め、夫の自由身分を買い取ったことが重要である。おそらく、気の遠くなるような長い年月をかけてソフィアは、来る日も来る日も市場に立ち、この金を貯めたに違いない。そして、ソフィアの行動で最も興味深いのは、彼女が、自分自身の自由ではなく、夫であるジョージ・ベルの自由身分を買い取ったことであった。

---

41 「プロト・ペザントリー」については、シドニー・W・ミンツ（藤本和子訳）『聞書 アフリカン・アメリカン文化の誕生―カリブ海域黒人の生きるための闘い―』岩波書店、2000年、第4章を参照。ミンツは、カリブ海域における「奴隷の主体的経済」の到達点を示すキー概念として、この言葉を用いている。

42 Special report of the commissioner of education on the condition and improvement of public schools in the District of Columbia, submitted to the Senate, June 1868, and to the House, with additions, June 13, 1870（以下、Special report of the commissioner of educationと略記）, p.196. 訳内の（ ）は筆者による。

なぜ彼女は、自分ではなく夫の自由身分を買い取ったのであろうか。この点については、報告書では何も書かれていないため推測の域を出ないのだが、おそらく彼女は、家族戦略としてこのような行動を取ったのではないかと考えられる。すなわち、1800年当時は、たとえ自由身分であっても女性が就ける職業は、家事使用人、洗濯女、お針子など、非常に限られていた。それに対して男性の自由人の場合、就ける職業の選択肢は広く、そして女性以上に多くの賃金を稼ぐことが可能であった[43]。そのためソフィアは、夫を最初に自由身分にして多くの金を稼いでもらうことで、最終的には、家族全員の自由身分の買い取りを最も早く実現できると判断したのではないだろうか。ただしその場合でも、夫婦の信頼関係が極めて重要な前提となっていたことは間違いない。なぜならば、夫を自由人にしても、家族を見捨てて行方をくらませたりせず、常に家族のそばにいて支えてくれるという信頼があってはじめて、ソフィアの選択は成り立つからである。そして実際に夫のジョージは、妻と息子たちの自由身分を買い取ることに尽力した。このように「家族の自由を買い取る」という行為からも、奴隷の結婚と家族形成が、奴隷主による強制的なものでは決してなかったことがうかがえるのである。そしてソフィアとジョージは、夫婦ともに自由身分を獲得したその６年後に、今度は、ワシントンDCエリアにおいて最初の黒人学校の建設に尽力することになる。

次に、もう一人の黒人奴隷女性アリシアについての記述をみていこう。

> ソフィアの姉妹の１人が…アリシア・タナー夫人である。彼女は、その高潔さや博愛心のために、ワシントンDCでは皆が知っており、また黒人の間ではDC以外でも広く知られている。彼女を知る者はみな、彼女に尊敬の念を抱いている。…タナー夫人は、1400ドルで自らの自由身分を購入し、その後、彼女のたぐいまれな活動を開始した。（彼女自身の自由身分を買い取る）最後の275ドルの支払いは、1810年６月29日に完了した。…1826年にタナー夫人は、彼女の姉ロリーナ・クックとその５人の子どもたちの自由を買い取った。…1828年には、姉クックの残りの子どもたちと孫…すなわち全部で、姉とその子ども10人、そしてさらに５人の孫を解放したのであった。姉に対しては800ドル、その子どもたちに対しては平均でそれぞれ300ドルを支払った。タナー夫人はまた、ロティ・リグスと彼女の４人の子どもたち、そしてジョン・バトラー―彼は後に有能なメソジストの牧師となる―の自由を買い取った。1837年にタナー夫人は、シャーロット・デイヴィスの自由を買い取った。……タナー夫人は、黒人の教育や地位向上にとって有益なあらゆる計画に対して支援を行った。…タナー夫人が1864年に亡くなった時、彼女はかなりの財産を残した。彼女の夫は、かなり前に亡くなっており、彼女には子どもがいなかった[44]。

---

43　当該期における女性の就業機会や男女の賃金格差については、Seth Rockman, “Women’s Labor, Gender Ideology, and Working-Class Households in Early Republic Baltimore,” *Explorations in Early American Culture,* supplemental issue of *Pennsylvania History: A Journal of Mid-Atlantic Studies*, Vol. 66, 1999を参照。

44　Special report of the commissioner of education, pp.196-197. 訳中の（ ）は筆者による。以下の研究書においても、ソフィアとアリシアについての言及がみられる。 McLaughlin Green, *The Secret City: A History of Race Relations in the Nation’s Capital*, Princeton University Press, 1967, p.16; Mary Beth Norton, Herbert Gutman, and Ira Berlin, “The Afro-American Family in the Age of Revolution,” in Ira Berlin and Ronald Hoffman eds., *Slavery and Freedom in the Age of the American Revolution*, University Press of Virginia,

このアリシア（タナー夫人）の記述において最も驚くべきことは、彼女が、合わせて22人（！）もの親族や友人の自由身分を買い取ったことである（彼女自身には子どもがおらず、夫も早く亡くしていた）。そして、その「たぐいまれな活動」の出発点となったのが、市場での野菜の行商であったことは重要である。また、自身の自由を買い取る際、「最後の275ドルの支払いは、1810年６月29日に完了した」という記述から、アリシアは、奴隷主との交渉によって、分割払いでの自由身分の買い取りを行っていたこともわかる。またアリシアが、女性の親族や友人の解放に尽力していたことから、家族を自由にするための資金が、夫婦の枠を超えて、親族や友人の援助によっても調達されていたことがうかがえる（とりわけアリシアの事例からは、女性同士の支援が確認できるのである）。その後アリシアは、ソフィアと同様、黒人の教育や地位向上のために資金面で積極的な援助を行っていくのだが、いずれにせよ彼女は、類まれな商才をもったビジネス・ウーマンであったことに間違いはない。

以上の考察をふまえて、ここでいよいよ、本稿の「はじめに」で述べた問いに戻ることにしよう。冒頭で述べた絵画（『ペッパー・ポット売り』）に描かれた「市場の黒人奴隷女性」とは、自らの自由とともに、夫や子どもたちの自由、すなわち、家族の自由を買い取るために、日々、路上行商に励んでいた女性の姿であったと考えられるのである[45]。言葉を換えるならば、彼女たちは、市場での路上行商を通じて、日々繰り返される日常の中で、家族の離散をもたらす奴隷制と闘っていたと言えよう。黒人奴隷女性たちは、自らの利益のために市場を利用し、家族の自由を手に入れる道を切り拓こうとしていたのであり、こうした意味で市場という空間は、奴隷にとってセーフティ・ネットの機能を果たしていたとも言えるのである[46]。また市場は、ソフィアとアリシアの事例にみられるように、黒人奴隷のビジネス・ウーマンを育む重要な場所でもあった。この点に関して、これまで何度も取り上げてきたヴァージニアの農場経営者パーキンソンは、次のように述べている（下線は筆者による）。

---

1983, p.189; Mary Beth Corrigan, "'It's a Family Affair': Buying Freedom in the District of Columbia, 1850-1860," in Larry E. Hudson, Jr., ed., *Working Toward Freedom: Slave Society and Domestic Economy in the American South*, University of Rochester Press, 1994（以下、Corrigan, "Buying Freedom"と略記）, pp.177-178; Mary Beth Corrigan, "The Ties That Bind: The Pursuit of Community and Freedom Among Slaves and Free Blacks in the District of Columbia, 1800-1869," in Howard Gillette, Jr., ed., *Southern City, National Ambition: The Growth of Early Washington, D.C., 1800-1860*, George Washington University Center for Washington Area Studies, 1995, p.75.

45 もちろん、『ペッパー・ポット売り』の黒人女性が、奴隷ではない可能性もあるだろう。確かに、この絵の舞台となったペンシルヴェニア州では、すでに1780年に北米初の奴隷制廃止法が成立していた。しかしこの法は漸次的解放を定めたものであり、1780年より前に生まれた奴隷は、解放の対象とはならなかった。また、1780年以降に生まれた奴隷の子どもであっても、直ちに自由人となったわけではなく、実際には28年間の年季奉公の義務が課されたのである。すなわち、28歳に達するまでは完全な自由身分を獲得することはできなかった。この隷属義務から解放されるには、本稿で考察されたような「自由身分の買い取り」が必要であった。この絵が描かれた1810年時点においては、フィラデルフィアの多くの黒人は、奴隷か、28年間の年季奉公義務下にあったと推察される。したがって、たとえ奴隷でなくとも隷属身分に家族がある限り、本稿で論じたように、ペッパー・ポット売りの黒人女性が、家族の自由身分を買い取るために路上行商をしていた可能性は充分に考えられるのである。ペンシルヴェニア州の1780年奴隷制廃止法については、Gary B. Nash, *Forging Freedom: The Formation of Philadelphia's Black Community, 1720-1840*, Harvard University Press, 1988, pp.60-65, 76-79を参照。

46 経済的に豊かではない白人女性にとっても、市場はセーフティ・ネットの機能を果たしていた。この点については、註１を参照されたい。

黒人たちは、腕の良い市場の商い人である。黒人たちは、白人以上により多くのものを、しばしばより高い値段で売りさばくことができる。…私が最初にアメリカを訪れた時、ひどく驚いたのは…奴隷にもかかわらず、黒人が相当の金を持っていることであった[47]。

パーキンソンの「驚き」は、われわれの驚きでもあるのだが、黒人奴隷たちは、「腕の良い市場の商い人」として、「奴隷にもかかわらず…相当の金を持って」いたのであり、そしてこのことから、ソフィアやアリシアのような路上行商による貨幣の蓄積と財産所有は、決して例外的なものではなかったと推察されるのである。この点については、さらなるケース・スタディの積み重ねが必要となるが、ここでは、19世紀半ばのワシントンDCの黒人コミュニティを分析した、メアリ・コリガンの研究を紹介しておきたい。1850年代の事例となってしまうが、コリガンの研究によれば、この時期に自由身分となった黒人奴隷のうち、少なくとも４人に１人（25％）は、家族のメンバーによる買い取りであったことが確認できるという。その際、男性奴隷が先に自由人となり、残りの家族のメンバーを買い取った事例や、親族や友人の資金協力の下で買い取りがなされた事例も確認されている[48]。コリガンが史料として用いた奴隷主による奴隷解放文書は、記載情報が極めて限定的なため、奴隷がいかなる経済活動によって資金を調達したのかまでは、残念ながらわからない。しかし、黒人奴隷女性にとって金を稼ぐ手段が限られていたことを考えると、彼女たちが、「菜園と市場販売の結合」によって自由を買い取る資金を手に入れていた可能性は、充分に考えられるのである。

## Ⅲ.“wage”の慣習、ならびに農村と都市をつなぐ奴隷たちのネットワーク

以上が、「市場の黒人奴隷女性」についての問いをめぐる、ひとまずの結論であるが、もちろん、残された課題も多い。本稿では最後に、こうした課題のいくつかを取り上げて、現時点での筆者の考えを問題提起的に提示したい。

最初に、前述のソフィアに関する記述の中に、「ソフィアは、市場向けの菜園をもっており、市場の開催日には毎日、アレグザンドリアの市場へ通っていた」という一節があったことを思い出してほしい。通常、市場は、日曜日を休みとし、週５～６日ほど開催されるのが常であった[49]。それゆえ報告書の記述に従えば、ソフィアは、平日はほぼ毎日、市場に出向いて野菜の販売に勤しんでいたことになる。しかし、奴隷身分である彼女が、毎日、奴隷主の元を離れて、どうやってこのような商いを行うことができたのであろうか。

---

47　Parkinson, *A Tour in America*, pp.433-434.

48　Corrigan, “Buying Freedom,” pp.176-180（書誌情報については、註44を参照）. コリガンは、奴隷主がワシントンDC地区の治安判事に提出した奴隷解放書の記録から、これらの数字を算出している。また、これらのデータは、記載された奴隷の情報が非常に限定的であるため、解放が家族の買い取りによるものであったのかどうかも含めて、詳細がわからない場合が多い。夫が先に自由人となり、家族のメンバーを買い取った事例としては、たとえば1849年に、ナサニエル・ジャクソンは、妻と３人の子どもの自由身分を買い取り、1855年には残りの２人の子どもの自由を買い取っている。また、親族や友人の資金援助の下で買い取りがなされた事例としては、1856年に、32歳のエリザ・ジョンソンは、彼女の友人の協力によって375ドルの資金を工面し、奴隷主から自由身分を買い取っている。 Ibid., pp.178-180.

49　市場の開催日時については、拙稿「19世紀アメリカにおける市場法（１）」、61-62頁。

この問題を解くカギは、“wage”（「納入金」）と呼ばれる慣習にある。“wage”については、これまで本邦における奴隷制研究では全く触れられてこなかったのだが、実は、18世紀の北米奴隷制社会においては、奴隷は、週当たりいくら、月当たりいくらという「納入金」（この納入金が“wage”と呼ばれた）を奴隷主に支払うことで、事実上の労働の自由を手にすること―自ら望む場所へ行き、自ら望む仕事に就くこと―が可能であったのである。もちろん、すべての奴隷がこうした慣習を利用できたわけではなく、その獲得は、奴隷主に対する奴隷の「交渉力」に大きく依拠していた[50]。現時点ではまだ、この問題を包括的に論じる史料を充分に収集・検討していないため、ここではサウス・カロライナ植民地に焦点を絞って、“wage”の慣習と「市場の黒人奴隷女性」との関係を考察してみたい。

まず、サウス・カロライナ植民地における“wage”の慣習を示す史料として、1734年 3 月20日付けの『サウス・カロライナ・ガゼット』紙に掲載された、次のような記事がある（下線は筆者による）。

> チャールズ・タウンでは、奴隷主が奴隷に、週単位で稼ぎに出ることを許可することが、当たり前common practiceとなっている。…このことは、現行法に違反するだけでなく、奴隷が怠惰、アルコール依存症、その他の悪徳に手を染める入り口となっている[51]。

この記事は、チャールズ・タウンで開かれた大陪審での議論を紹介したものであるが、ここでは奴隷が、「週単位で稼ぎに」出ていたことが明確に述べられている。奴隷は、奴隷主との間に“wage”の取り決めを行っていたと考えられるのだが―すなわち、毎週 1 回だけ奴隷主の元を訪れ、 1 週間分の納入金を支払った―、何よりもこうした慣習が、「当たり前」となっていたことは驚くべきことであろう。そして、この記事の 6 年後に制定された1740年サウス・カロライナ奴隷法の第33条においても、より明確に、“wage”の慣習が次のように述べられている（下線は筆者による）。

> 奴隷主の中には、奴隷と取り決めをして、一定額を納めることを条件に、奴隷が自由に仕事に就くことを許可している者がいる。こうした慣習により、奴隷たちは、奴隷主に金を支払うために盗みをはたらいたり、酒や悪徳に身をゆだねているのである[52]。

---

50 “wage”の慣習は、もともとプランテーションの農閑期に、奴隷主が収入確保のため奴隷を一時的に貸し出していたことに起因する。しかし多くの奴隷主は、自ら貸し出し先を探すよりも、奴隷自身に仕事を見つけさせ、納入金を納めさせるようになった。Olwell, *Masters, Slaves, and Subjects* , pp.159-160.

51 *South Carolina Gazette*, March 30, 1734.

52 An Act for the Better Ordering and Governing Negroes and Other Slaves in This Province, XXXIII, 1740. “wage”の慣習の広まりの背景には、収入確保という奴隷主の利害だけではなく、とりわけ都市部を中心とした労働需要の高さ（人手不足）が挙げられるだろう。実際、“wage”の慣習を利用した奴隷の中には、都市部に部屋を借りて住む者も多くいた。たとえば、1772年 9 月24日付けの『サウス・カロライナ・ガゼット』紙によれば、「チャールズ・タウンでは、多くの部屋や台所などが、奴隷に対して貸し出されている。こうした奴隷の中には、さらに他人に対して又貸しをしている者さえいるのである。これらの部屋は、逃亡奴隷の隠れ家として、盗品の隠し場所として役立っている」。*South Carolina Gazette*, September 24, 1772; Olwell, *Masters, Slaves, and Subjects*, p.161. 本邦においては、専ら農村（プランテーション）における奴隷制にのみ関心が向けられてきたが、こうした都市社会における奴隷制という問題は、今後深められるべき重要な論点である。

もちろんこの条文は、現状を批判し、新たな取り締りを導入しようとするものだが、しかしここからも、「一定額を納めることを条件に、奴隷が自由に仕事に就くことを許可」する“wage”の慣習が、広く展開していたことがうかがえるのである。また実際、同法によって“wage”が違法化された後も、“wage”の取り締まりが行われた形跡は見当たらない。むしろ聞こえてくるのは、“wage”の蔓延に対する嘆きの声であった。たとえば、1747年にチャールズ・タウンの市議会に提出された請願書では、“wage”の悪弊が次のように述べられている。

> 奴隷主は、黒人奴隷たちに、（市場で）商品を売買する完全な自由を与えているだけでなく…奴隷たちが喜ぶような、その他の関連する自由をも認めている。これらの自由は、奴隷主に対する納入金 wages の支払いを条件に付与されている。また奴隷主は、どうやって奴隷が金を手に入れたのかを聞くことはしない。…奴隷たちは、かなりの金をもっており、小麦粉、バター、リンゴなどを買い漁り、チャールズ・タウンの住民にそれらを販売している。このような慣習は、奴隷に怠惰な生活をもたらし、主人の支配からの自由をもたらすであろう[53]。

ここでは、“wage”を通じて奴隷が、市場で路上行商をする「完全な自由」を獲得していたことがうかがえるが、同時に奴隷主が、納入金さえ支払ってくれれば、「どうやって奴隷が金を手に入れたのか」には無関心であったことにも注目したい。なぜならば、奴隷主が奴隷の稼ぎを把握していないため、納入金以上の稼ぎがあった場合には、こうした稼ぎはすべて奴隷自身のものになったからである。実際、請願書によれば、「これらの奴隷は、かなりの金をもって」いたのであり、そして、このような“wage”と結びついた市場での路上行商が、「主人の支配からの自由をもたらす」ものと認識されていたことは、黒人奴隷にとっての市場の意味を考える上で、非常に重要である[54]。

こうした“wage”の慣習と「市場の黒人奴隷女性」との関係は、その後も一貫して維持されたようである[55]。たとえば、1772年 9 月24日付けの『サウス・カロライナ・ガゼット』紙では、25年前の記

---

53 “Petition of Sundry Inhabitants of Charlestown,” February 5, 1747, *The Journal of the Commons House of Assembly*, Vol.7: September 10, 1746 – June 13, 1747, pp.154-155. 訳中の（ ）は筆者による。

54 “wage”の慣習が奴隷制に対してもつ意味について、サウス・カロライナの農場経営者であったヘンリー・ローレンスは、1776年 1 月 6 日付けの弟ジェイムズへの手紙の中で、象徴的な言葉を述べている。すなわち、“wage”の慣習を通じて、「奴隷はある意味、自らの主人になったのである」と。Olwell, *Masters, Slaves, and Subjects*, p.161. また、注目すべきエピソードであるのだが、1763年11月 5 日付の『サウス・カロライナ・ガゼット』紙は、“wage”を利用して煙突掃除夫をしていた黒人奴隷男性たちが、「傲慢にも、通常の掃除料金を引き上げるために、そして、その法外な要求が認められない場合には仕事をボイコットするために、一致団結している」と伝えている。この煙突掃除夫の奴隷たちは、まるで自由労働者のように、より良い賃金を求めて一種の「ストライキ」を行っていたのである！*South Carolina Gazette*, November 5, 1763; Olwell, *Masters, Slaves, and Subjects*, p.164. このように、“wage”の慣習は、奴隷と自由人の境界線をあいまいにさせるものであった。

55 1765年 6 月 8 日付けの『サウス・カロライナ・ガゼット』紙でも、奴隷が自由に路上行商を行っていることに対して、大陪審が次のような非難を行っている。すなわち、「チャールストンの行政官や警察は…黒人による路上行商や魚の販売に対して、それらを取り締まる法律を全く実施しようとはしていない」と。*South Carolina Gazette*, June 8, 1765. ここからも、“wage”の慣習と結びついた路上行商の持続がうかがえるが、同時にまた、ここでも奴隷法の規定は有名無実化していたことがわかる。

事と同じ内容が繰り返されている。

> ほぼ毎日見られることなのだが…（チャールズ・タウンの）ロウアー市場には、家禽、果物、卵などが農村から運び込まれる。市場の付近で絶えず行きかっているのは、だらしなく、怠惰で、騒々しい沢山の黒人女性である。彼女らは、朝から晩までそこに陣取り、好きなように、自らの勘定で商いを行っている。それは、奴隷主に納入金 wages を支払うためであるが、しかし彼女らは、はるかに多くの金を手にしていた。奴隷主は、金さえ支払われれば、彼女らがいくら稼いだかについては全く関心をもっていない[56]。

この記事は、「ストレンジャー」The Strangerなるペンネームの者が投稿した小論の一部なのであるが、ここでも、多くの「市場の黒人奴隷女性」が、「好きなように、自らの勘定で」商いを行い、納入金以上の「はるかに多くの金を手にしていた」ことがわかる。おそらく彼女たちは、前述したアリシアと同様、市場での商いによってビジネス・ウーマンとしての経験を積んだに違いない。本節の冒頭の問いに戻るならば、おそらくソフィアもまた、この記事に描かれた女性たちと同じように、“wage”の慣習を利用して、「朝から晩まで」市場に立ち、路上行商に励むことが出来たと考えられるのである。

しかしここで、新たな疑問が生じることになる。それは、“wage”によって黒人奴隷女性が、毎日のように市場で路上行商を行うことが出来たとすれば、自らの菜園で作られた野菜のみで、商品をまかなうことが果たして出来たのだろうかという問題である。この点について、現時点で筆者は、市場の黒人女性奴隷が、周辺地域、とりわけ周辺農村の黒人奴隷女性たちとの間に、何らかの経済的結びつきをもっていたのではないかと考えている。すなわち、市場の黒人奴隷女性は、周辺農村の黒人奴隷女性から、定期的に野菜や果物を調達していたのではないだろうか。別の言い方をすれば、農村の黒人奴隷女性たちは、自らが栽培した野菜や果物の販売を市場の黒人奴隷女性に委託することで、貨幣および様々な商品（衣服や食料）を手にしていたのではないだろうか。こうした都市と農村の黒人奴隷女性のネットワークについては、今後、多くの史料に基づきながら実証を深めていく必要があるのだが、ここでは、その可能性を示す１つの史料を紹介したい。それは、前述した「ストレンジャー」による投稿記事の続きの部分であるのだが、そこでは次のように述べられている。

> （チャールズ・タウンの）ロウアー市場の黒人女たちは、市場にやってくる農村の黒人に対して、結びつきや影響力をもっている。そのため彼女たちは、白人よりも優位な立場で、必要なものを手に入れることが出来るのである。…農村の黒人たちは、市場の女たちから、他の人には売らないように言われた商品を納めるために…こうした商品をカヌーで運び、女たちの元へ送り届けた[57]。

---

56 *South Carolina Gazette*, September 24, 1772. 訳中の（ ）は筆者による。1740年のサウス・カロライナ奴隷法第31条では、「チャールズ・タウンで所有されている奴隷が…自らの勘定で商いを行うことは違法である」と定められている。An Act for the Better Ordering and Governing Negroes and Other Slaves in This Province, XXXI, 1740. ここでも、奴隷法は有名無実化していたと言えよう。

57 *South Carolina Gazette*, September 24, 1772. 訳中の（ ）は筆者による。

ここでは、「市場の黒人女たち」が、「農村の黒人」から商品を調達していたことが明確に述べられている。前述した投稿記事の部分でも、「ロウアー市場には、家禽、果物、卵などが農村から運び込まれる」と書かれていたが、おそらくこれらの商品もまた、「農村の黒人」から「市場の黒人女たち」へ届けられたものであったのではないだろうか。そして、こうした農村からの商品調達力によって、「市場の黒人女たち」は、白人の競争相手よりも「優位な立場」に立って、商いをすることが出来たと考えらえるのである。この点に関連して、「農村の黒人たちは、市場の女たちから、他の人には売らないように」指示されていたことも重要である。このことは、市場と農村の黒人奴隷女性の間には、何らかの「取引上のパートナーシップ」のようなものが結ばれていたことを示しているのではないだろうか。また、「農村の黒人」たちの商品が、カヌーで市場に運ばれていたことにも注目したい。通常、プランテーションは河川沿いに展開され、河川交通を通じで物資の輸送が行われていたのだが、その運搬を担ったのは、船頭のスキルをもったプランテーションの黒人奴隷男性たちであった[58]。おそらく彼らが、農村の女性たちから農産物を預り（あるいは彼女たちごと舟に乗せ）、市場の女性の元へ送り届けていたと考えられるのである。言い換えれば、農村と市場の黒人女性奴隷たちのネットワークを支えていたのは、こうしたカヌーの操縦に長けた黒人奴隷男性であったと考えられるのである。いずれにせよ、「市場の黒人女性奴隷」たちの経済活動の背景には、こうした農村と都市をつなぐ奴隷たちのネットワークが存在していたのではないだろうか。

このように、“wage”の慣習や農村と都市をつなぐネットワークによって、多くの奴隷が貨幣や財産を所有していたとすれば、奴隷主は、こうした奴隷の財産所有に対して、一体どのような姿勢で臨んだのであろうか。本稿を閉じるに際して、最後に、この問題を考えてみたい。現時点での筆者の考えを述べるならば、奴隷主は、奴隷の財産所有を事実上黙認していた、あるいは黙認せざるを得なかったのではないかと考えている。もちろん、今後実証を深めていく必要があるのだが、ここでは、その可能性を示す１つのエピソードを紹介したい。それは、チャールズ・タウンの10kmほど南西にあるジョンズ・アイランド地域のプランテーションで、1781年１月に起きた奴隷の暴動である。１月20日付けの『サウス・カロライナ・アンド・アメリカン・ジェネラル・ガゼット』紙では、この暴動に対する、近隣住民の以下のような目撃談が掲載されている（下線は筆者による）。

> 木曜日の朝、ある少年が私のところにやって来て、（プランテーションの）監視人が黒人を１人殺したと訴えた。私はすぐに現場へと向かった。…黒人たちは狂乱の中にいた。それはまるで反乱の様相を呈していた。私は一体何をしたらよいのかわからなかった。…（奴隷主の）スチュアート氏が話してくれた簡潔な説明によると、その日の朝、黒人たちは、鍬、斧、そして棒で奴隷監督者や監視人たちを攻撃した。奴隷監督者の１人に斧が振り下ろされ、…斧の柄が彼の頭に一撃をくらわせた。…ある黒人は、監視人の喉を稲刈り用の鎌でかき切ろうとし、また別の黒

---

58　ローカントリー地域で河川交通を担った黒人奴隷の世界については、考古学的成果を取り入れながら見事な考察を行った、リン・ハリスの研究をぜひとも参照されたい。Lynn B. Harris, *Patroons & Periaguas: Enslaved Watermen and Watercraft of the Lowcountry*, University of South Carolina Press, 2014. また、河川沿いに展開した市場の形成に、黒人奴隷のボート・マンが果たした役割については、Emma Hart, *Trading Spaces: The Colonial Marketplace and the Foundation of American Capitalism*, University of Chicago Press, 2019, pp.61-62.

人は、マスケット銃で監視人の脳天を叩き割ろうとした。火薬を入れる筒や棒で、監視人をメッタ打ちにした黒人もいた。……この暴動の原因とみなされているのは、監視人が、７名の奴隷たちの所有する穀物を押収しようとしたことにある。事件の前の晩、この７名の奴隷たちは、ボートで外出しており不在であったのである[59]。

かなり生々しい暴動の記述であるが、ここで着目したいのは、暴動の原因である。すなわち、プランテーションの監視人が、夜間にボートで外出していた奴隷たちの穀物を、不在時に勝手に押収したことが、流血沙汰の引き金になっていたのである。すなわち、奴隷の財産に手をつけることは、奴隷主の生命さえも危うくするリスクをもっていたのであった。この点に関して、サウス・カロライナの農場経営者であり同植民地の代議会議員でもあったヘンリー・ローレンスは、1766年に、自らの所有するプランテーションの監視人に対して次のような指示を出している。それは、奴隷を別のプランテーションに移す場合には「奴隷たちの財産に配慮しなさい。そして各自の財産がそれぞれの元へ安全に届けられることをしっかりと保証しなさい」と[60]。これらのことから推察されるのは、多くの奴隷主が、トラブル回避のために奴隷の財産権を認めざるを得なかったのではないかということである。そしてまた、ジョンズ・アイランドでの暴動は、奴隷反乱を理解する上での新たな視点をも提示してくれる。すなわち、奴隷の反乱や暴動は、通常イメージされるような、苛酷な奴隷制そのものを否定しようとする革命的闘争というよりも、むしろ、奴隷たちが日々交渉と合意によって粘り強く獲得してきた自らの権利の領域を、奴隷主が一方的に干渉・侵害しようとした時に起こる、力による制裁・報復行為であったのではないだろうか、という視点である。もちろん、この問題については多くの事例を再検討する必要があるのだが、こうした視点から、あらためて奴隷の反乱や暴動を読み解くことは、黒人奴隷の主体的生を理解する上で、意味ある作業であると思われるのである。

## おわりに

最後に、これまで考察してきたことをもう一度整理し、本稿の結びとしたい。まず本稿は、『ペッパー・ポット売り』の絵画にみられるような「市場の黒人奴隷女性」の経済活動を、「奴隷の主体的経済」の重要な構成要素としてとらえ、さらにそれを奴隷の家族形成の問題と関連づけながら、黒人奴隷の主体的生を描こうとする１つの試みであった。そこで明らかになったことは、第一に、18世紀において黒人奴隷の男女の出会いや恋愛が、プランテーション外部への非合法的な移動の自由によって実現されていたこと、したがって、異なるプランテーション間での男女の結婚が一般的にみられ、夫が妻の元を訪れる「通い婚」が奴隷の家族の大きな特徴であったとことである。奴隷の日常を目の当たりにしていた奴隷主の日記や手紙から浮かび上がってくるのは、奴隷法とは乖離した、「夜に無制限の自由をもつ」奴隷の姿であり、そして、ときに10km以上もの道のりを歩きながら、家族の元を訪れる男性奴隷の姿であった。奴隷たちの多くは、自ら積極的にパートナーを探し、たとえ「通い婚」になろうとも両者の合意によって結婚を選択し、家族を形成したと考えられるのである。

---

59 *South Carolina and American General Gazette*, January 20, 1781. 監視人については、註23を参照。

60 Olwell, *Masters, Slaves, and Subjects*, p.148.

そして第二に、結婚後も奴隷の家族は常に離散の不安を抱えており、それに抗う手段が、①「逃亡」と②「自由身分の買い取り」であった。この「自由身分の買い取り」の重要な手段となったのが、市場での路上行商という日常的営みに他ならなかったのである。それゆえ、『ペッパー・ポット売り』に描かれたような「市場の黒人奴隷女性」とは、自身のみならず、夫や子どもの自由を買い取るために、路上行商に励む女性の姿であったと考えられるのである。また、奴隷の逃亡の最大の理由が、引き裂かれた家族や友人（恋人）に会うためであったことや、夫婦の協力と信頼に基づいて自由身分の買い取りが実現されたことからも、奴隷たちは、奴隷主による強制ではなく、自らの意志によって結婚を選択し、家族を形成したことがわかるのである。また本稿では最後に、“wage”という慣習によって、週または月ごとに一定の金を奴隷主に支払うことで、事実上「労働の自由」を手にした奴隷がいたこと、そして、市場で日々路上行商を行った黒人女性は、この“wage”を通じて、「労働の自由」を手に入れた者たちであったことを論じた。また、プランテーション（農村）と市場（都市）の黒人女性の間には、「取引上のパートナーシップ」に基づく、生産と販売のネットワークが存在していた可能性があることも展望した。これらの問題は、黒人奴隷たちの主体的生を描き直す上で、今後深められるべき重要な論点であると思われる[61]。

本稿を閉じるに当って、最後にあるエピソードを紹介したい。それは、一般的にはあまり知られていないことなのだが、実は、南北戦争後、奴隷制が廃止された時、解放された奴隷たちが最初に行ったことは、何よりもまず、引き裂かれた家族を探すことであったのである。すなわち、解放された奴隷たちは、全米中の新聞に、離散した家族の情報を求める無数の広告を掲載したのである。以下は、1866年 3 月24日付けで掲載された『カラード・テネシーアン』紙（ナッシュビル）の広告である。

> 情報求む。5 人の子に 4 年間会っていません。名前は、20歳のジョセフィン、14歳のセリア、13歳のキャロライン、10歳のエレン、 8 歳のオーガスタ。…子供たちのどのような情報も、母親がありがたく頂戴します。住所は、ジョージア州オーガスタ。
>
> オーガスタ・ブライアント、ルティニア・ブライアント[62]

---

61 “Second Slavery”論に代表されるように、綿花プランテーションが本格的に展開した19世紀においては、本稿が対象とした18世紀と比べて、奴隷制は苛酷さを増すという議論がある。しかし、「奴隷の主体的経済」論者の 1 人であるJohn Campbellは、サウス・カロライナにおいては綿花プランテーション展開後も、「奴隷の主体的経済」は持続していたことを議論している。John Campbell, “As ‘A Kind of Freeman’?: Slaves’ Market-Related Activities in the South Carolina Upcountry, 1800-1860,” in Berlin and Morgan, *The Slaves’ Economy*. 筆者もまた、19世紀においても奴隷たちは、奴隷主との「交渉」を重ね、「奴隷の主体的経済」の領域を維持し続けたのではないかと考えている。もちろん、19世紀における「奴隷の主体的経済」の在り方については、ディープ・サウスを含めたより多くの個別研究が必要とされる。同様に、19世紀における奴隷の家族形成のあり方についても、基本的に筆者は、本稿で描いたフレームワークが当てはまるのではないかと考えている。19世紀アンティベラム期における「奴隷の主体的経済」と奴隷主との関係については、差し当たり、註37で挙げた沼岡氏の一連の論文を参照されたい。

62 ウィリアムズ『引き裂かれた家族を求めて』、218－219頁。おそらく、離れ離れとなった家族の再会の物語は、すべてがハッピーエンドで終わったわけではないであろう。長い別離の後、夫や妻のどちらかが、すでに新しいパートナーと別の家族を形成した場合も多かったのではないだろうか。アフリカ系アメリカ人作家チャールズ・チェスナットは、短編小説「若きころの妻」The Wife of His Youth（1898年）の中で、こうした夫婦の再会がもつ複雑な問題を描いている。家族の再会がもつ喜びと哀しみと沈黙については、ウィ

おそらく広告の依頼主であるオーガスタが母親であり、彼女は必死の思いで、5人の子どもを探すための広告を打ったに違いない。こうした広告からわかることは、奴隷たちにとって、奴隷制廃止によってすべてが終わったのではないということである。むしろその瞬間から、失われた家族を探すための長い闘いが始まったのであった。奴隷自身にとって奴隷制とは、まず何よりも家族の問題であったのである。

---

リアムズ『引き裂かれた家族を求めて』「第6章 語れぬほどの深い幸福感―家族の再会」を参照されたい。

また、奴隷であったチャールズ・ボールは、メリーランドからジョージアへ売却された際、引き裂かれた妻ジューダとの結びつきを忘れまいと、「メリーランドで妻が作ってくれた古い麦藁帽」を大事に身に着けていた。しかし、ある日、プランテーションでの「目立った外見を避けるため」、この「古い麦藁帽」を捨てることを決心する。このエピソードは、ボールの自伝の中で、わずか1文で記されているにすぎないが、ジューダの思い出の品を捨て去ることは、ボールにとって、新たな家族を築くという決断を示すものであったのではないだろうか。Ball, *Fifty Years in Chains*, p.118（ボールについては、註17も参照）; Morgan, *Slave Counterpoint*, p.539.